今　泉　遺　跡

INEZUMI　　SITE

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

伊那北停車場山寺上村線

2004

伊那市教育委員会

伊那市建設部建設課

あ　い　さ　つ

平成15年度伊那北停車場山寺上村線の道路用地内埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査が、発掘調査団と用地交渉の都合により５月下旬から６月下旬、９月下旬から11月下旬までの二時期に分けて実施されました。

この今泉（いねずみ）遺跡周辺一帯は報告書の中で後述するように豊富な湧水地点が数多く存在し、周辺には数多くの遺跡が発見されています。この遺跡が世の注目を浴び出した初見は大正末年頃に鳥居龍蔵文学博士が上伊那地方を訪れ、遺跡を実地踏査され、その成果を大著『先史及原史時代の上伊那』に著わしてからであります。その後、上伊那教育会が編纂した『上伊那誌歴史篇』の中では実際に発掘調査した結果が林茂樹氏によって詳細に書き綴られています。このような経緯があるために、今泉遺跡の存在は地元では夙に知られていました。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、縄文中期中葉の竪穴住居址６軒、同期の土坑１基、平安時代中期の竪穴住居址２軒と、それにともなう多くの遺物が検出されました。なかでも、詳細については後述しますが、三編髪の土偶は一きわ目立つ存在で、土偶研究史の一頁を飾るのに大きな意義を持つものと思われます。今回の調査はほんの限定された範囲だけでありましたが、これだけの成果を収めることが出来たわけであり、広範囲の調査を実施すれば、今後、今泉遺跡の価値はますます高くなることを確信する次第であります。

発掘調査実施及び報告書刊行に当って、深いご理解をいただいた伊那市建設部建設課、暑さが増し始めた６月から、寒さが厳しくなり出した11月までの長期間、この発掘調査に精励された御子柴泰正団長を始めとする調査団、作業員、地権者等関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成16年２月10日

長野県伊那市教育委員会

教育長　北　原　　明

例　言

1．本書は、伊那北停車場山寺上村線に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。

2．この緊急発掘調査は伊那市長の委託により、伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団を編成し、それに事業を委託して実施した。

3．本調査は、平成15年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

本田秀明　　飯塚政美

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図	本田秀明	飯塚政美
・土器及び石器実測図	本田秀明	飯塚政美
・土器拓影	本田秀明	飯塚政美
・土偶及び土製品実測図	本田秀明	飯塚政美

◎写真撮影者

・発掘及び遺構	飯塚政美	本田秀明
・遺　　物	飯塚政美	本田秀明

5．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6．出土遺物・遺構図及び実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

目　次

あいさつ
例　言
目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　環　境……5
　第１節　位置・地形・地質……5
　第２節　周辺遺跡との概要……6

第Ⅱ章　発掘調査の経過……8
　第１節　発掘調査に至るまでの経過……8
　第２節　調査の組織……8
　第３節　発掘調査日誌……9

第Ⅲ章　発掘調査……12
　第１節　調査の概要……12
　第２節　遺構と遺物……12
　　(1)　縄文時代の遺構と遺物……12
　　(2)　特殊な遺物……29
　　(3)　平安時代の遺構と遺物……31

第Ⅳ章　所　見……34

挿　図　目　次

第１図　伊那西部地域遺跡分布図……7
第２図　地形及びトレンチ・遺構配置図……13
第３図　第２号住居址実測図……14
第４図　第３号住居址実測図……14
第５図　第３号住居址出土土器拓影……15
第６図　第３号住居址出土石器実測図……16
第７図　第５号住居址実測図……17
第８図　第５号住居址出土土器拓影……18
第９図　第５号住居址出土石器実測図……20
第10図　第６号住居址実測図……21
第11図　第６号住居址出土土器実測図・拓影……22
第12図　第６号住居址出土石器実測図……23
第13図　第７・８号住居址　第１号土坑実測図…24
第14図　第７号住居址出土土器実測図・拓影……25
第15図　第７号住居址出土石器実測図……27
第16図　第８号住居址出土土器拓影……28
第17図　第８号住居址出土石器実測図……28
第18図　小型土器実測図……29
第19図　土偶実測図……30
第20図　板状土製品実測図……31
第21図　第１号住居址・竈実測図……31
第22図　第１号住居址出土土器実測図……32
第23図　第４号住居址・竈実測図……33
第24図　第４号住居址出土遺物実測図……34

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景
図版２　遺　構
図版３　遺　構
図版４　遺　構
図版５　遺　構
図版６　遺　構
図版７　遺物出土状況
図版８　出土遺物

第Ⅰ章　環　　境

第１節　位置・地形・地質

当初に、今泉(いねずみ)遺跡までにたどりつく最短距離の道順を頭に描き出して見よう。ＪＲ飯田線伊那北駅で降車し、駅前に立ち並ぶ山寺商店街を左右に見ながら、駅前の西側近くに新たに設置された信号機を通り、西方に向かう。この地点から急傾斜の登坂が延々と細長く続き、これが緩傾斜に成り出す場所の右側が長野県伊那北高等学校への入口であり、矢印のついた案内板が建てられている。この登坂一帯は現在、伊那中央病院への表玄関的役割を果たす大規模な道路拡幅改良事業が完了し、見事な舗装道路が出来上がっている。

さらに西進すると広い平坦地が展開し、道路を挟んで山寺区高尾町集落が著しい発展を成し続けている現状である。今回の発掘調査地点は、いわば高尾町集落の北端部と御園南部地域とが接する一帯に該当する。この周辺一帯は大正末期から昭和初期にかけて西天竜土地改良事業によって大規模な圃場整備事業が行われ、天竜川から引水した西天竜の通水が可能となり、見事な美田が造り上げられたのである。

伊那市を包含する伊那谷の地形的景観の特徴は東の南アルプス（別称、赤石山脈）、西の中央アルプス（別称、木曽山脈）に挟まれ、天竜川を主流とする造盆地状地形にある。この盆地状地形は南北に細長い袋状の縦谷状を呈し、北の辰野から南の天竜峡まで約60km、幅は約４～10kmにわたる平坦面を展開している。両アルプスの山裾、山麓に源を発する三峰川などを代表とする大小様々な小河川が複雑多岐にわたる山麓扇状地面や数段に及ぶ河岸段丘面を形成しながら天竜川に注ぎ込み、いわばこれらは天竜川の支流的存在である。天竜川を中心にして東側を竜東地区、西側を竜西地区と大別して呼んでいる。今泉遺跡周辺の地形的起因は小沢川によるところが極めて大と想定でき得よう。小沢川は木曽山脈系茶臼山の支流である南沢山と権兵衛峠を境にする経ヶ岳山麓系の沢水を集めて東流し、伊那市荒井区錦町・坂下区入舟町付近で天竜川と合流する。

次に今泉遺跡と南側で隣接する高尾町集落周辺の微地形・微地質を見てみると、丘陵状地形と洞状地形とに大別でき、後者の代表として福沢洞があげられる。福沢洞は仁連沢(にれさわ)の窪地と鳥谷川(とやがわ)の窪地が合わさった所から、川の流れに沿って西方から東に向けて幅広く開け、その東端は「高尾神社」の崖下の南洞まで連続的になっている。湧水が各所にあり、温暖で住み良い場所であった確証として「福」という良い名前がつけられている。「福」とは平安時代末期頃から発生する仮名的(けみょうてき)（良い名前のニックネーム的存在）な意義づけが可能である。

伊那北駅から高尾町に登ってくる坂道に沿った凹地を「堂城洞」と呼んでおり、城という名からして、近くに中世城館跡の存在が連想されるが、その点については「第２節　周辺遺跡との概要」で詳細に述べることにする。前述した湧水地点について触れてみる。福沢洞の奥深くに仁連沢(にれさわ)・福沢(ふくざわ)・越清水(こしみず)という小さな沢が一続きになっており、ここからの湧水は上水道とし

て高尾町住民一帯の生活を潤している。

今泉遺跡は前述したようにその主体は御園南部地籍に属しており、今泉の名が示すように、湧水地帯が広い面積を占め、この水を利用して養鱒場やワサビ栽培が盛んに行われ、これを生業として経営を行っている家が存在している。

第２節　周辺遺跡との概要

伊那市内で、伊那西部と呼ばれている広い範囲の地域があり、その中で、現在確認されている遺跡は75個所に達している。これらの分布、立地については「第１図　伊那西部地域遺跡分布図」を参照すれば、ある程度は理解できると思われる。この図を概観すれば遺跡の存在状態が三分類に大別が可能と想定できる。その一つは山麓扇状地の扇頂部面、扇側部面。もう一つは天竜川の支流である小黒川、小沢川、大清水川、大泉川の両岸の河岸段丘面。さらにもう一つは天竜川の支流、天竜川によっての山麓扇状地末端部面（学名：扇端部面）に形成された河岸段丘面や断層段丘面である。

これらの遺跡を垂直分布面で概観すると、標高650m位から950m位に含まれ、一見するのに、パノラマ状的に理解できる。前述した三分類が可能な必須条件はあくまでも水便の問題である。

伊那西部地域に存在する75個所の遺跡の時代的な内訳は、旧石器を出すもの６、縄文草創期２、縄文早期３、縄文前期10、縄文中期60、縄文後期６、縄文晩期２、弥生前期１、弥生中期１、弥生後期６、古墳３、奈良・平安時代の土師器を包含するもの26、同じく須恵器を包含するもの29、灰釉陶器を包含するもの21、さらに、緑釉陶器を包含するもの２、中世陶磁器などを包含するもの12、近世の遺構として月見松経塚や旧原田井井筋がある。

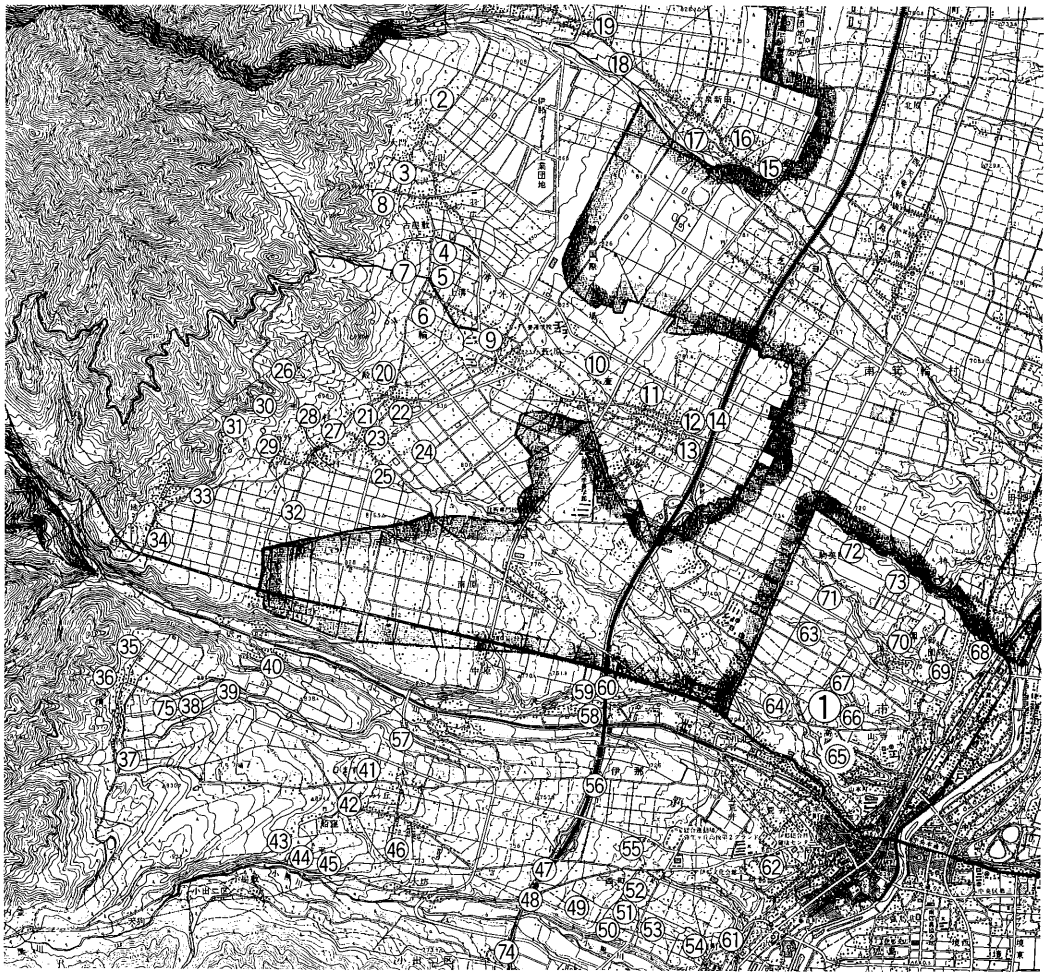
高尾遺跡はかつて小規模な緊急発掘調査を実施し、縄文前期に関西地方を中心に隆盛した北白川下層式土器片が出土しており、伊那市を代表する縄文前期の遺跡となっている。平成14年度、このようなことが発端となって中央病院道路整備の折りに試掘調査を実施したが、何も遺構が検出されず、その結果として高尾遺跡の存在範囲が分かった。隣接している石塚遺跡は平成10年度～11年度にかけて中央病院建設事業に伴って緊急発掘調査が実施され、平安時代の隅丸方形状竪穴住居址が４軒検出され、それらの中から土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製紡錘車１点が出土している。さらに、平成13年度緊急地方道路整備事業市道伊那北与地線道路改良事業の導入に伴って緊急発掘調査が行われ、縄文中期初頭の竪穴住居址１軒、縄文中期中葉の土坑１基の検出を見た。堂城洞と呼ばれている南側に「狐林城」という城郭があり、東は切り立った深い崖、北と南は深い洞、城の大手は西の原に配備し、空堀、土塁を構築してある。

山麓扇状地帯遺跡群　この分類の仕方は山麓扇状地の扇頂部から扇測部周辺に展開している遺跡群を指して、このように呼ぶことにした。この一帯は山峰部分が終わって、水便、日当りがともに良好で、居住するのには好適地に該当する。

天竜川支流両岸遺跡群　この分類の仕方は天竜川に注ぎ込む小黒川、小沢川、大清水川、大

泉川などの両岸に形成された小規模の河岸段丘面、または川に面した傾斜面と、後述するが近年、日本地質学会で有名になった小黒川活断層面に立地している遺跡群を指しているので、このように呼ぶことにした。この一帯のどこかに古代「令制東山道」の渡河地点が存在していたわけであるが、明確な地点は把握されておらずに、推定での論議を呼んでいる。

河岸段丘遺跡群・活断層段丘遺跡群　経ヶ岳山麓より東へ向かって緩傾斜状に広く展開している複合扇状地の扇端部、つまり、河岸段丘形成面に天竜川が大きく左右した位置に点在している遺跡群を指している。この一帯の西端部に日本地質学会で全国的に有名になった小黒川活断層が南北に細長く帯状に走行しており、その比高は数mと低く、一見するに丘陵状となり、いわば今、提唱され出した活断層段丘の一種との説が定着化しはじめている。(本田秀明)



遺跡の名称

①今泉　②北割　③田代　④古屋敷　⑤金鋳場　⑥財木　⑦蔵鹿山麓　⑧経ヶ岳山麓　⑨西箕輪小学校　⑩大萱西
⑪西箕輪養護学校　⑫熊野神社　⑬富士塚　⑭在家　⑮高根　⑯久保畑　⑰塚畑高根　⑱中道南　⑲桜畑　⑳殿屋敷
㉑天庄1　㉒上戸　㉓天庄2　㉔溝畑　㉕下の原　㉖堂洞　㉗富士垣外　㉘宮垣外　㉙堀の内　㉚上の原
㉛小花岡　㉜中の原　㉝与地山寺　㉞与地原　㉟北方　㊱矢塚畑　㊲八人塚　㊳おぐし沢　㊴丸山清水　㊵穴沢
㊶ますみヶ丘上　㊷船窪　㊸鼠平2　㊹鼠平1　㊺上手原　㊻城畑　㊼ますみヶ丘　㊽赤坂　㊾伊勢並　㊿八人塚古墳
(51)狐塚南古墳　(52)狐塚北古墳　(53)山の神　(54)小黒南原　(55)富士塚　(56)城楽　(57)小沢原　(58)小沢神社　(59)月見松経塚　(60)月見松
(61)ウグイス原団地　(62)上の山　(63)石塚　(64)鳥居原　(65)高尾　(66)原垣外　(67)かんぜん　(68)御園東部　(69)御園南部　(70)宮ノ前
(71)清水洞　(72)牧ヶ原　(73)大清水　(74)山本田代　(75)関畑

第1図　伊那西部地域遺跡分布図（1：50,000）

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経過

今回、発掘調査の対象となった今泉遺跡は伊那北停車場山寺上村線に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記すと次のようになる。

平成14年10月11日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事、伊那市教育委員会生涯学習・スポーツ課職員、伊那市建設課職員とで伊那市役所会議室にて三者協議を実施する。

平成15年４月２日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団団長御子柴泰正両者間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結する。

平成15年11月25日付けで、今泉遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成15年11月25日付けで、今泉遺跡埋蔵物発見届を伊那警察署長宛に提出。

平成15年11月25日付けで、今泉遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成16年２月10日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団団長御子柴泰正とで変更委託契約書を締結する。

第２節　調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を記した。

伊那市教育委員会

委員長　登内　孝
委　員　上島武留
〃　伊藤晴夫
〃　田畑幸男（平成13年12月22日～平成16年１月31日）
〃　宮脇晴夫（平成16年２月13日～　　）
教育長　北原　明
教育次長　伊藤　隆
事務局　塚本哲朗（生涯学習・スポーツ課長）
〃　白鳥今朝昭（生涯学習・スポーツ課長補佐・社会教育係長）
〃　武田一夫（生涯学習・スポーツ課長補佐・青少年係長）
〃　飯塚政美（生涯学習・スポーツ課主幹）
〃　山口千江美（生涯学習・スポーツ課主査）
〃　北林　太（　〃　）
〃　田原節子（　〃　）

発掘調査団

団　　長　御子柴　泰　正（長野県考古学会会員）
調 査 員　飯　塚　政　美（日本考古学協会会員）
　〃　　本　田　秀　明（長野県考古学会会員）
作 業 員　城倉三成　織井和美　酒井公士郎　有賀秀子　那須野進　松下末春
　　小田切守正（敬称略 順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成15年５月28日（水）伊那市考古資料館より、発掘現場へ発掘機材を運搬する。その場所へコンテナハウス、スペースハウス、簡易トイレを設置する。

平成15年５月29日（木）本日は用地買収境にビニールテープを張って、仕切りが分かるようにする。南北に長く、第１号トレンチを設定して掘り始める。ソフトテフラ層面まで１ｍ～1.5m程度と極めて深かった。縄文中期土器片、平安時代の灰釉陶器片、土師器片が出土した。

平成15年５月30日（金）第１号トレンチに並列して間隔を空けて第３号トレンチを設定する。このトレンチもやはり深くてソフトテフラ層までに、１m50cm程度もあった。

平成15年６月９日（月）第１号トレンチと第３号トレンチの中間に南北に長くトレンチを設定し、これを第２号トレンチと命名する。これより若干の遺物が出土する。

平成15年６月12日（木）用水路を隔てた北側に第４号トレンチを設定し、掘り進める。このトレンチより平安時代土師器口縁部破片が集中的に出土。この土師器周辺の精査により、トレンチ内に隅丸方形状竪穴住居址の一辺の隅が検出され、待望の住居址検出で一同は大いに歓喜に湧く。

平成15年６月20日（金）第１号トレンチ、第２号トレンチ、第３号トレンチの位置を全測図に掲載する。これらのトレンチの清掃を済ませて、写真撮影を終え、埋め戻しを完了する。

平成15年９月29日（月）第４号トレンチの続きを掘り進めると、遺構が次々と検出され、南側より第１号住居址、第２号住居址、第３号住居址と命名し、バックフォーにてトレンチ掘りを西へ西へと進めていく。発掘現場より少し離れた西側の所へ、コンテナハウス、スペースハウス、簡易トイレを設置する。

平成15年９月30日（火）第４号トレンチを完掘し、多少の間隔をとって東側から西側へ向かって２本のトレンチを設定し、これらを第５号トレンチ、第６号トレンチと名付けて掘り進めていく。本日の段階では遺構の検出は何も見られなかった。

平成15年10月１日（水）第５号トレンチの最西端部を掘り進めていくと、方形状の黒い落ち込みが見られ、住居址の通し番号からして第４号住居址と命名する。第４号トレンチ、第５号トレンチ、第６号トレンチの配置図を作成する。この住居址を掘り進めていくと土師器完型に近い坏２個と灰釉陶器耳皿１個が出土した。水田造成時、つまり、土地改良事業実施時に破壊

されたと見えて、壁高は10cm内外であり、西壁中央部付近に石芯粘土竈の残骸があった。これらの遺物より見て、本住居址は平安時代中期頃と決定できるのであろう。本住居址の北東付近で切り合い関係にて長円形状プランの住居址が検出され、これを第３号住居址と命名し、精査を進めていくと、北西壁際より三編髪と耳栓を完全に耳朶にはめ込んだ状態での土偶の顔面部が出土した。

平成15年10月２日（木）第３号住居址の東側を拡張すると、住居址のようなプランが確認でき、第５号住居址と命名し、プランの確認に全力を注ぎ込み、東西に細長くベルトを残す。第３号住居址、第４号住居址の床面までほぼ掘り下げを終える。バックフォーにて第１号住居址の周辺を拡張し、プラン確認につとめる。

平成15年10月６日（月）第３号住居址、第４号住居址の柱穴掘りを実施し、ほぼ完掘し終える。引き続いて、第５号住居址の掘り下げを実施する。これらの検出された西側の水田にトレンチを入れる。これを第７号－１トレンチと命名し、掘り進めていくと住居址の確認があった

平成15年10月７日（火）トレンチ掘りを西側へ次々と進める。第５号住居址の掘り下げを進めると、土器が多量に出土した。第３号住居址の東西セクションを北側の道路用地境界線上で図面を取る。第３号住居址の平面実測を完了する。

平成15年10月15日（水）第３号住居址のレベルを取り終え、実測を全て完了。第４号住居址の平面、断面実測完了。第５号住居址を発掘していくと、どうも東側へ拡張していることが分かった。東西にベルトを残し、セクションを取る。第５号住居址の炉内付近より大変に珍しい、小型の尖底土器が出土し、これは、若干、片口となっていた。火を焚く時に油か何か、発火用の液体を注いだものと思われるが、周辺の調査結果をまたなければならなかった。多量の遺物の出土があった。

平成15年10月16日（木）第５号住居址を掘り下げると、胴体部分を残した小型で、線刻が美しい見事な土偶が出土する。トレンチ掘り、柱穴の掘り下げを進める。

平成15年10月20日（月）第５号住居址のベルトを取りはずして調査を進めていくと同時に、柱穴と炉内周辺を掘り下げていく。

平成15年10月21日（火）第５号住居址の周溝の掘り下げ、バックフォーにて第７号－１トレンチ、第７号－２トレンチ、第８号トレンチを掘り下げ、その後、ジョレン掻きを実施し、遺構を捜す。この状態の時に写真撮影を実施する。午後、南北にセクションを残して、第１号住居址の掘り下げを進めていくと、竈は東壁中央部付近に存在している模様である。この周辺より土師器坏が出土。第８号トレンチ内に検出された住居址のプランを確認するために、バックフォーにて掘り進めていく。

平成15年10月24日（金）第１号住居址の完掘、第２号住居址の掘り下げを実施する。第８号トレンチのジョレン掻きを進め、プランを確認するように努める。遺物は多量に出土した。

平成15年10月27日（月）第１号住居址、第２号住居址、第３号住居址の清掃を実施し、写真

撮影を終える。第８号トレンチで確認された第６号住居址の掘り下げを進めると、多量の土器片が出土し、発掘調査に向けてより慎重さが要求された。第７号－１トレンチで検出された住居址のプランを確認する。

平成15年10月28日（火）第６号住居址の掘り下げを進める。東西にベルトを残して進めていくと、それの20㎝程度下に床面が検出され、石棒の出土が見られた。第６号住居址の北側に近接して住居址が検出され、これを第７号住居址と命名して、拡張を進め、ほぼプランが確認された。

平成15年10月29日（水）第１号住居址、第２号住居址、第６号住居址の掘り下げ、第７号住居址のプラン確認を済ませる。

平成15年10月30日（木）第６号住居址をほぼ完掘する。この住居址の北側に二つの住居址が発見され、これらを第７号住居址、第８号住居址と名付け、プランを確認し、掘り進めていくと、どうも二つは切り合い関係になっているようである。遺物の出土量はその割に少なかった。

平成15年11月４日（火）第７号住居址、第８号住居址の掘り下げを進めていくと、第７号住居址の西側で第８号住居址を切っており、したがって、第８号住居址が古く、第７号住居址が新しい格好となる。セクションベルトを第７号住居址、第８号住居址の二つにかけて東西に残して、実測を終える。第８号住居址から小さいが、きちんと方形に囲まれた石囲炉が検出された。

平成15年11月５日（水）特に、第７号住居址、第８号住居址内に存在する柱穴、貯蔵穴を中心にして掘り下げを進めていく。第５号住居址の炉内周辺を極めて丁寧に掘り下げていく。

平成15年11月７日（金）第４号住居址、第５号住居址、第６号住居址、第７号住居址、第８号住居址の清掃をして、写真撮影を終える。第５号住居址の平面実測を開始する。

平成15年11月８日（土）土曜日であったが、作業の都合上仕事を進める。第５号住居址の平面、断面実測を終了して、第６号住居址の平面実測をほぼ終える。第４号住居址竈のたち割りを東西、南北の十文字に実施する。

平成15年11月17日（月）第７号住居址、第８号住居址の平面実測。第３号住居址、第４号住居址、第５号住居址、第６号住居址、第７号住居址の内で、一括土器に近いものを取り上げる。

平成15年11月18日（火）現場の後片付けを実施する。第６号住居址、第７号住居址、第８号住居址のレベルを測る。午後、全測図を作成する。

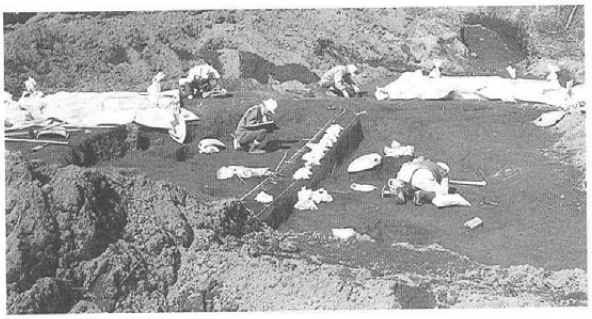
平成15年11月19日（水）発掘現場の後始末を行う。

平成15年11月22日（土）土曜日であったが、寒くならないうちに作業を終了するために現場の最後の後片付けを実施する。

平成15年11月24日（月）祭日であったが、寒くならないうちに作業を終えるようにとの作業員の要望により、最終的な後片付けを実施する。本日をもって今泉遺跡の全ての発掘作業を終了する。

平成15年12月～平成16年３月　図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、３月の報告書の刊行に努力を払った。

平成16年３月　報告書を刊行し、本事業の完了をみる。（飯塚政美）



発掘風景

発掘風景

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査の概要

今回、発掘調査を実施した今泉遺跡周辺は都市計画用途地域と農業振興地域との境界線上の近くにあり、現況は宅地と水田が混在化している。近年、近くに「伊那中央病院」が開設され、それに至る道路網の整備が急激化し、それに付随して住宅化に拍車を掛け、顕著な変貌を成し遂げている段階である。今泉遺跡の存在は前述した「あいさつ」で触れているように大正末年に来伊され、実地踏査を行い、その成果をまとめた大著『先史及原史時代の上伊那』（鳥居龍蔵著）に詳細に記述され、その中で鳥居文学博士はこの遺跡の重要性を強く指摘しており、多くの人々がその存在を知っている実状であった。このような経緯より、調査に入る前から大いに期待を抱いていた。

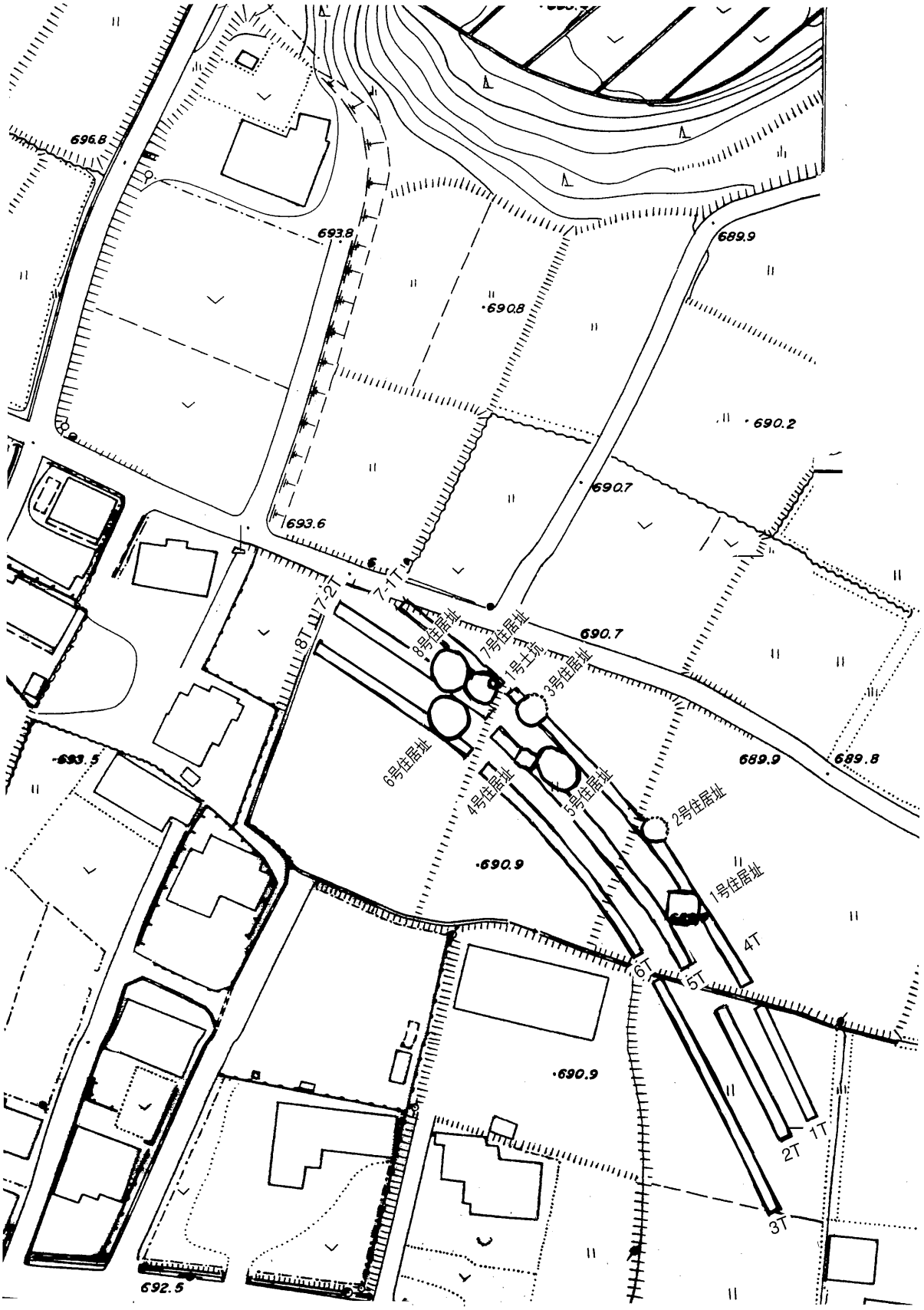
発掘調査地点は全面的に水田下であり、前述したように一度、土地改良事業を実施したために切土、埋土状態を十二分に精査して、現地にバックフォーを入れて調査に踏み切った。実際に掘り下げてみると、縄文中期中葉の竪穴住居址６軒、縄文中期中葉の土坑１基、平安時代中期の竪穴住居址２軒と、それらに付随する遺物が相当量検出した。住居址にいたっては土地改良事業時に造成されたとみえて、全般的に壁高は極めて低かった。これらの成果についてはこの報告書の中の「第Ⅲ章　発掘調査　第２節　遺構と遺物」を参照していただき、今泉遺跡の重要性を再認識してもらいたいものである。

第２節　遺構と遺物

（１）縄文時代の遺構と遺物

第２号住居址（第３図　図版２）

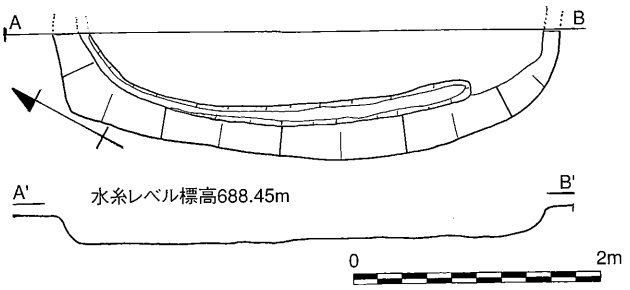
本址は第４号トレンチの中央部より、若干南側付近に検出されたが、東側の大部分は道路用



第２図　地形及びトレンチ・遺構配置図（１：1,000）

地外のために調査は不可能であり、その全体像は把握できなかった。表土面より60cm程度下がったソフトテフラ層面を掘り込んだ竪穴住居址で、調査された部分より見て、円形状の平面プランが想定できる。

規模は南北３m95cm程度、東西（前述した事由によって不明）を測る。



第３図　第２号住居址実測図

壁高は25～55cm程度の範囲に含まれ、外傾及び外湾気味で、全般的に凹凸が目だった。床面は大半が平坦で、堅い叩きとなっており、西側の壁面直下に幅10～20cm位、深さも同じ程度の周溝が部分的にあったが、柱穴、炉は用地外にあると想定される。

遺　物

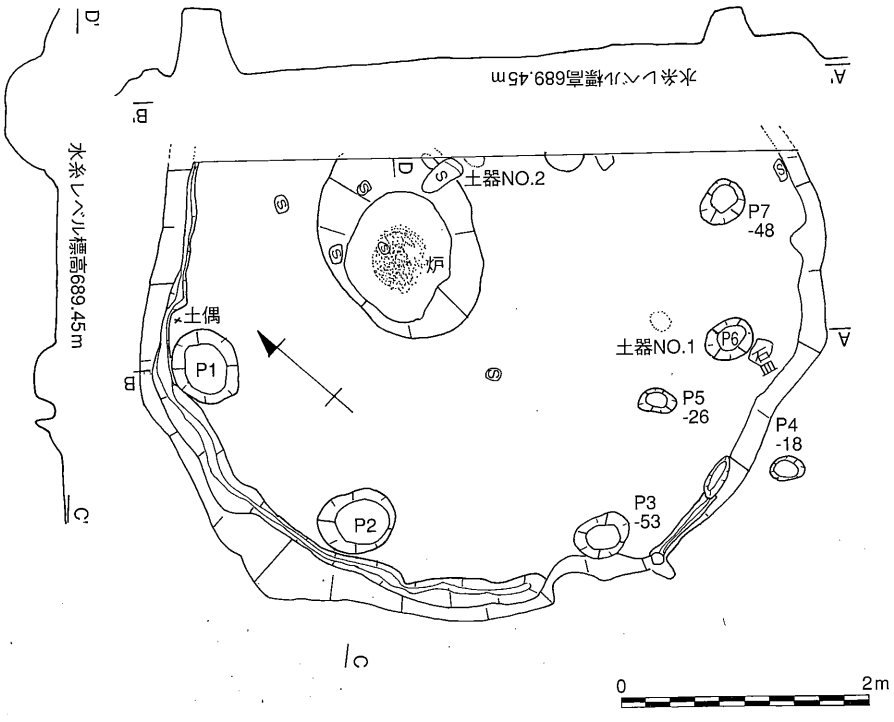
全く破片すら何も出土しなかったが、周辺の住居址の状況からみて、縄文中期中葉頃の時期と思われる。

第３号住居址（第４図　図版２・５）

本址は第４号トレンチの北端部付近に検出され、第２号住居址と同様に東側の一部は道路用地外のため調査は不可能であったが、大凡の全貌は把握できた。表土面より60cm程度下層のソフトテフラ層面を掘り込み、ところどころで凹凸はあるが全般的に円形状の平面プランを呈し、規模は南北５m45cm程度、東西（道路用地外のために不明）を測る竪穴住居址である。

壁は浅く、現在は10～30cm程度の数値を示していたのに過ぎなかったが、おそらく構築当初は相当の高さを有していたと想定されるが、前で幾度も触れているように、土地改良事業実施時に上面は破壊されたのであろう。外傾気味で、多くの凹凸が確認できた。

床面はほぼ平坦で、堅い叩き状を呈し、西側から南側にかけての壁面直下に幅10～20cm程度、深さは15～25cm程度で、凹凸が顕著な周溝が見られた。炉は



第４図　第３号住居址実測図

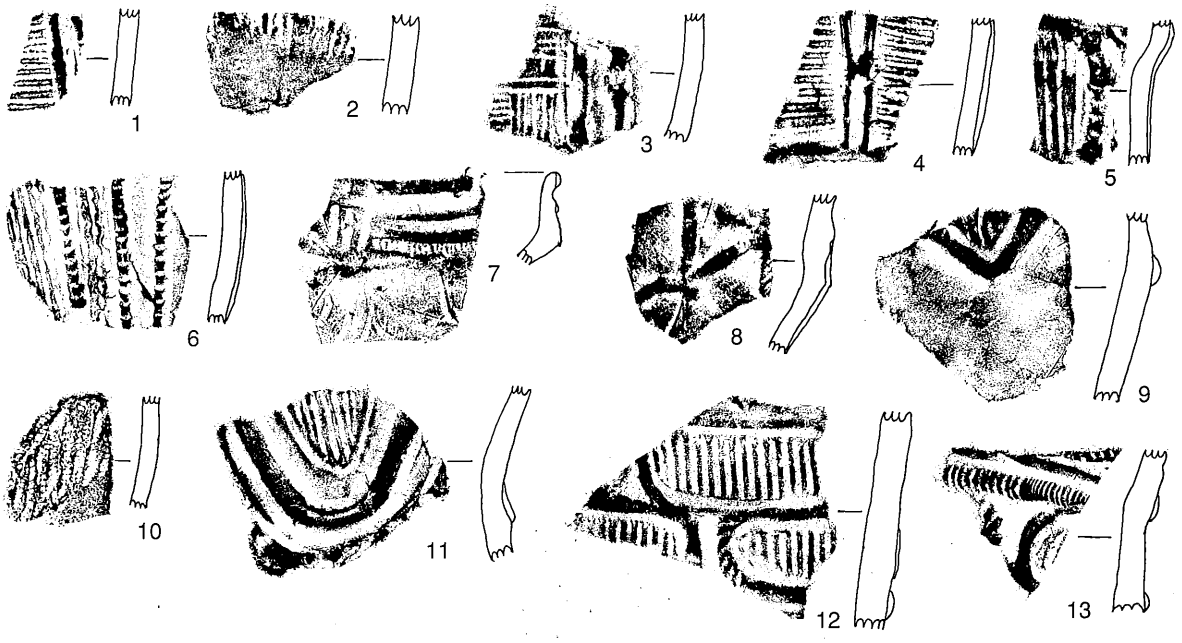
住居址の中央よりやや北寄りに構築されており、当初は円形状の摺鉢状形石囲炉であったと思われるように、現在は石が抜き取られた跡が明瞭であり、その中央部付近に多量の焼土が堆積していた。

柱穴は壁に沿って、規則正しく配列されており、全面的に調査が出来れば、８本の主柱穴の存在があり得ると思われる。

出土遺物は次に述べるが、縄文中期中葉後半の信濃に於ける「井戸尻式」に位置づけられると思われる。

遺　物（第５～６図）

第５図は第３号住居址出土土器拓影であり、（１～２）の出土地点は第４図に掲載してある（土器№１）の仲間に含まれている。（１）は隆線と沈線によって区画文が、（２）は沈線と無文帯によってそれぞれ文様構成が成されている。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母を含み、ピカピカと光っている。（３～４）は隆線が垂下し、その間に縦横の沈線が深く、鋭角状に施されている。赤黄褐色（３）、赤褐色（４）を呈し、焼成は中位（３）・良好（４）であり、両方とも、少量の長石を含んでいる。低い幅広の隆帯が１本（５）～３本（６）にわたって懸垂状に走り、その間にやや規則性を持つ沈線が垂れ下がっている。赤褐色（５）、黒茶褐色（６）を呈し、焼成は２片とも良好である。（５）の内面に炭化物が黒々と付着している。（７）は第５図に掲載した内では唯一の口縁部破片であり、破片中央部付近で屈折し、破片上部は幅広で浅い沈線が縦横に、左下の一部分に小さな連続爪形文が見られる。下部は無文帯によって占められている。赤褐色を呈し、焼成は中位で、少量の長石粒を含んでいる。（８）は無文地に細く、低い隆帯を無雑作に貼り付けてあり、文様に変化を持たせている。赤褐色を呈し、焼成は中位



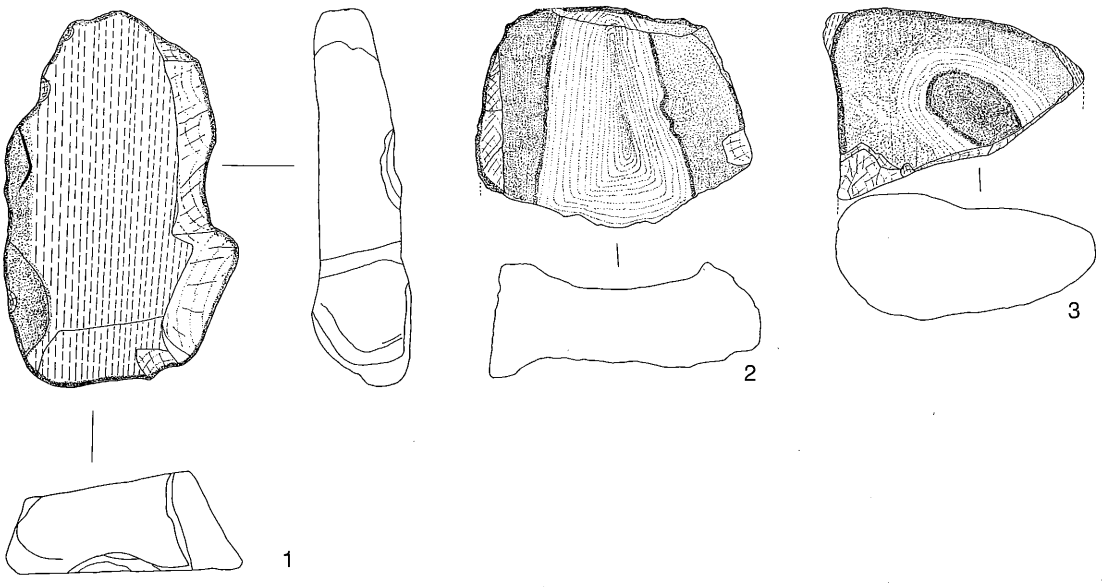
第５図　第３号住居址出土土器拓影（１：３）

で、少量の雲母を含み、内面に多量の炭化物が層のように付着している。(9、12～13) は、いわゆる櫛形文の一派であり、これらを細かく見てみると、無文帯の多いもの (9)、櫛形文が二段にわたっての構成 (12)、(13) は櫛形文を構成している隆帯に鋭い連続爪形文が加飾されており、これらは若干の時期差の違いであろう。赤褐色 (9)、黒褐色 (12～13) を呈し、3片とも焼成は良好である。

(10) は器面全面にわたって斜縄文が施されて、赤褐色を呈し、焼成は良好。(11) は器の中央部付近で大きく外屈し、同心円状の隆帯を付け、それらの間に沈線がくまなく見られるもの、赤褐色を呈し、焼成は中位である。(1～13) は縄文中期中葉頃の土器片であろう。

第6図に掲載したのは第3号住居址出土石器であり、その内訳は砥石 (1)、石皿 (2～3) である。(1) は大型で、地面に置いて使用したのであり、全面によく磨いた痕跡が見られる。おそらく磨製石器を作るためのものであろう。安易に磨き易い緑色岩製である。(2～3)はそれぞれ半分程度は破損しており、よく使用したものと見えて、その凹みは極めて深くなっている (2)、それに反し (3) の凹みは浅目である。(2) は三峰川産の緑色岩、(3) は質の粗い花崗岩を用いている。これらから見て、摺りつぶす素材の種類分けをして用いたことが考えられるのではないだろうか。このことに関しても、照葉樹林文化と大きく関連してくるのであろう。

特殊な遺物として土偶があり、それについては第19図で詳細に述べるので、ここでは割愛する。



第6図　第3号住居址出土石器実測図 (1：6)

第5号住居址 (第7図　図版3・5)

本址は第5号トレンチの西端部に、南西の隅に第4号住居址が本址の上に貼床をして住居址を構築した状態で検出された。表土面より60cm位下層のソフトテフラ層面を掘り込んだ竪穴住

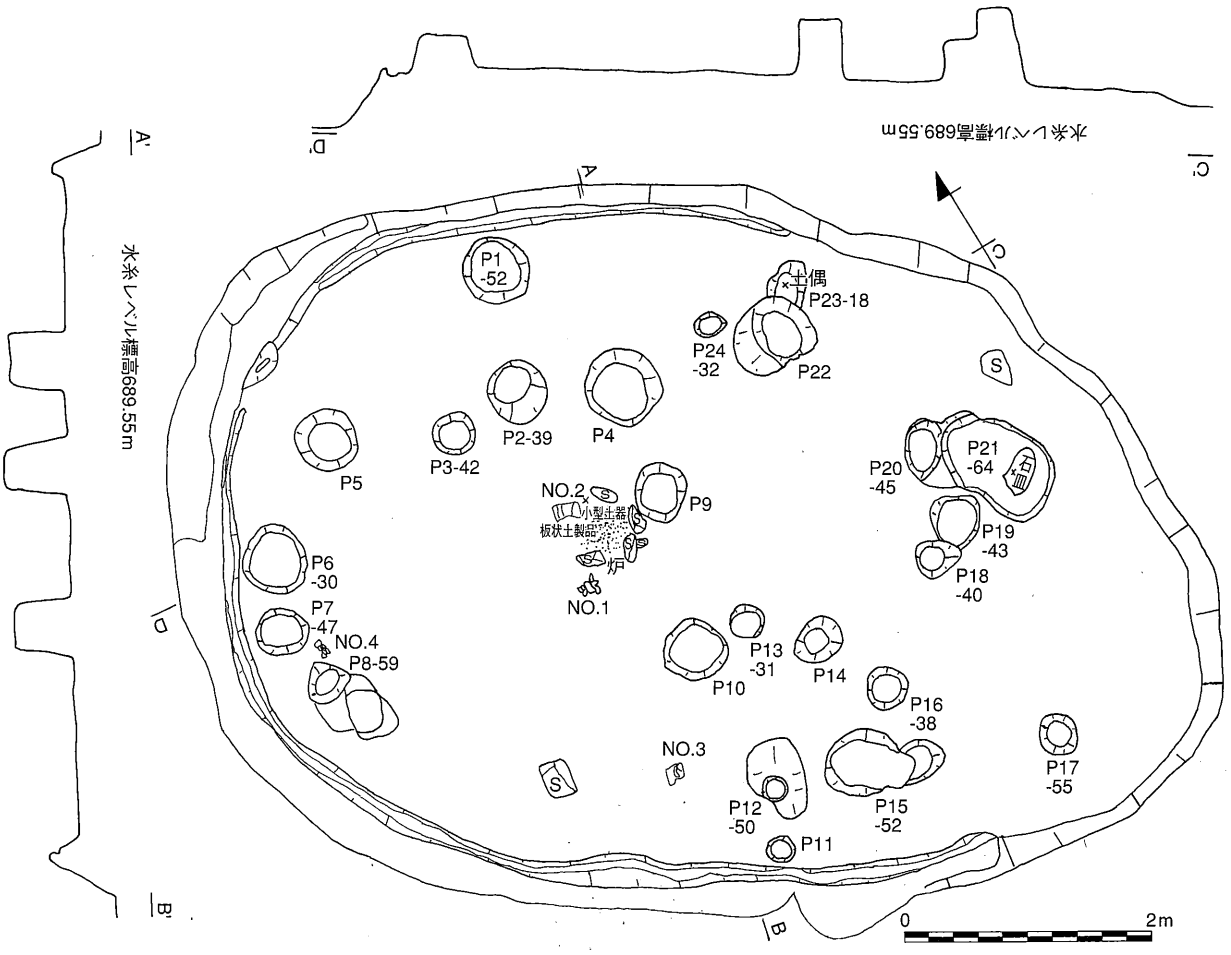
居址であり、その平面プランは構築時は円形状であったが、南側は調査段階での状態にて半円形状に後で改めて拡張したと想定でき、現況はところどころで蛇行状を呈するが、南北５m80cm程度、東西８m30cm程度の卵形状を呈するようになった。

壁高は15～35cm程度と割合に浅く、後世の造成によって上面が削り取られたと思われる。壁面は外傾気味、軟弱で、さらに凹凸が多かった。床面はほぼ平坦であったが、炉周辺は踏み固めたと思える程に極めて堅くなっていた。壁面直下に部分的に幅が狭く、浅い周溝がやや蛇行状に走行していた。

柱穴は20数本と極めて多く、構築時当初のと、拡張時のとは調査段階では判別できなかったが、Ｐ21にいたっては断面袋状を呈し、なかから石皿の出土があり、貯蔵穴に利用された可能性が極めて濃厚と思われる。

炉は構築当初の住居址のうちのほぼ中央部近くに位置し、南北60cm程度、東西60cm程度とやや小形の石囲炉であったと思われ、その近くにそれに利用した小さな石が配列され、それらの中に焼土が堆積しており、炉と決定づけられた。

本址は出土土器より見て、縄文中期中葉後半、信濃でいう井戸尻式期の新しい方に位置づけられると思われる。

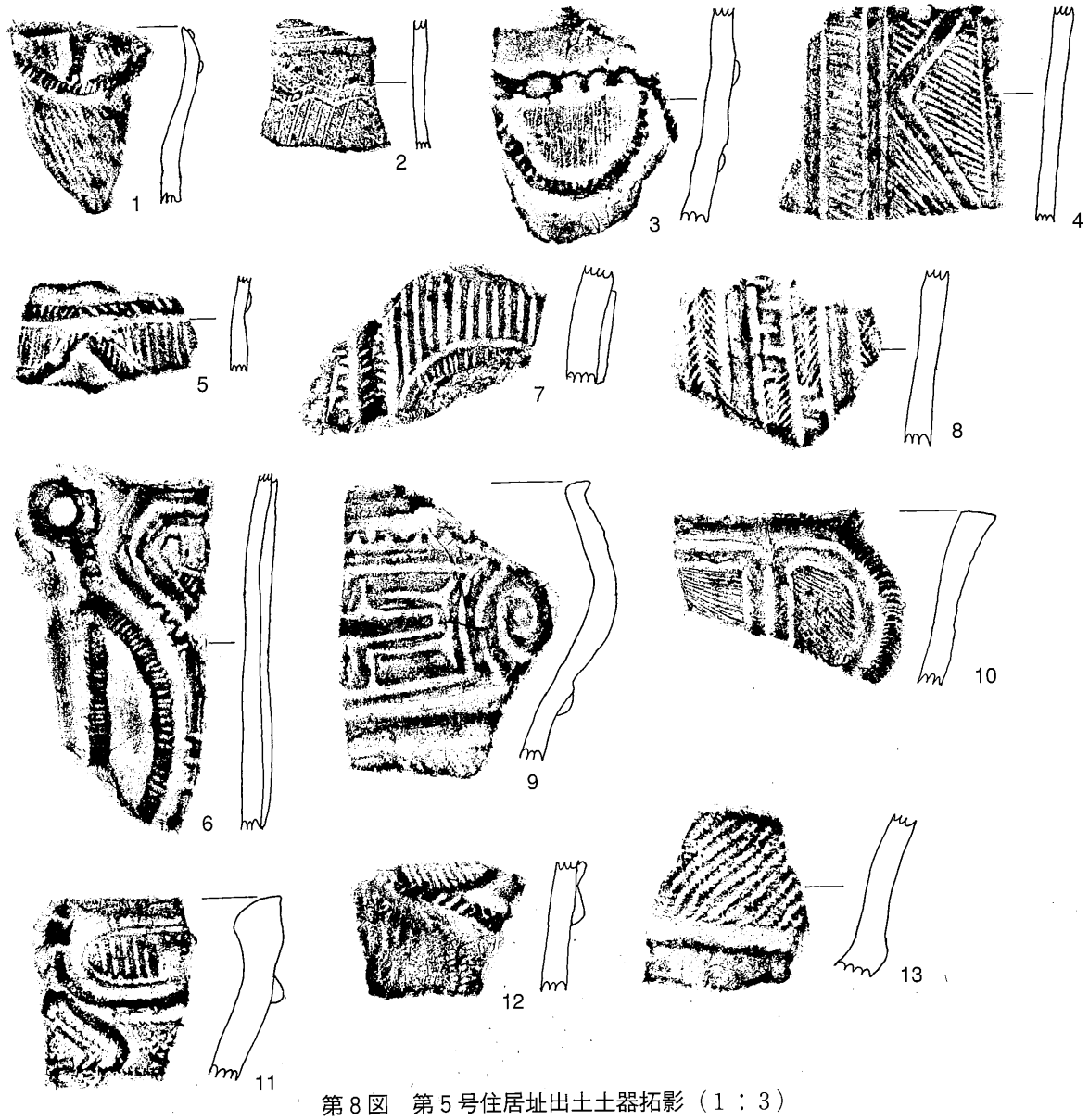


第７図　第５号住居址実測図

遺　物（第８～９図）

第８図は第５号住居址出土土器拓影である。（１）はやや内反する口縁部破片であり、外面にわたって斜縄文を施し、その上に口縁からそれの直下にかけて、粘土紐を眼鏡状に貼り付け、その上に斜縄文や刻目を付けて、文様効果を増している。薄茶褐色を呈し、焼成は良好。文様の特色、厚さから見て、縄文前期終末期に関西地方に隆盛した大歳山式土器の一派と思われ、本住居址とは直接的には関係はなく、土地改良造成時に他の地より飛び込んだ可能性が強いと思われる。

（２）は薄手式土器の一派で、無文地に沈線を横位、蛇行状、斜状に配し、考古学の編年でいう平出３Ａ式に属してはいるが、この土器の下限は一般的に縄文中期中葉まで下るので、その他の土器と伴出しても何も不思議ではない。薄茶褐色を呈し、焼成は良好で、多量の長石粒を含んでいる。（３、５）は櫛形文を構成している仲間であり、それらを構成している隆帯に連続



第８図　第５号住居址出土土器拓影（１：３）

刻目文（５）と指頭圧痕文（３）が付けられ、意匠化したあとが見受けられる。両片とも赤褐色を呈し、焼成は良好である。この文様は井戸尻式の際だった特徴であり、この住居址より相当量出土している。（４）は細く、鋭い沈線によって文様を成している縦位状区画文の一派であり、その源は諏訪地方であると考えられている。赤褐色を呈し、焼成は良好で、内面に多量の炭化物が付着している。

（６）は無文地に豪壮な隆帯を貼り付け、それの終末は瘤状を成し、また、上面に連続的に刻目を付けてある。破片の右上面に櫛形文風の名残が見受けられる。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

（７）は大きな隆帯を垂下させ、それに平行して無数の縦位状の半截竹管による鋭い沈線が走向しており、井戸尻式特徴の一つをかもし出している。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

（８）は沈線を縦位状、斜め状、ハの字状、コの字状の複雑多岐にわたって組み合わせ、文様効果をより充実化させている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。これも井戸尻式文様の一種である。

（９～10）は大きく外反する口縁部破片である。（９）は太い横位状の隆帯を境にして文様帯が二分でき、上部は沈線を渦巻状や横位状に、下部は斜縄文を施している。(10) は蛇行状の隆帯と沈線とによって縦位状の区画文を構成しており、一見するに（４）と酷似している。赤褐色（９)、黒褐色 (10) を呈し、焼成はともに良好である。

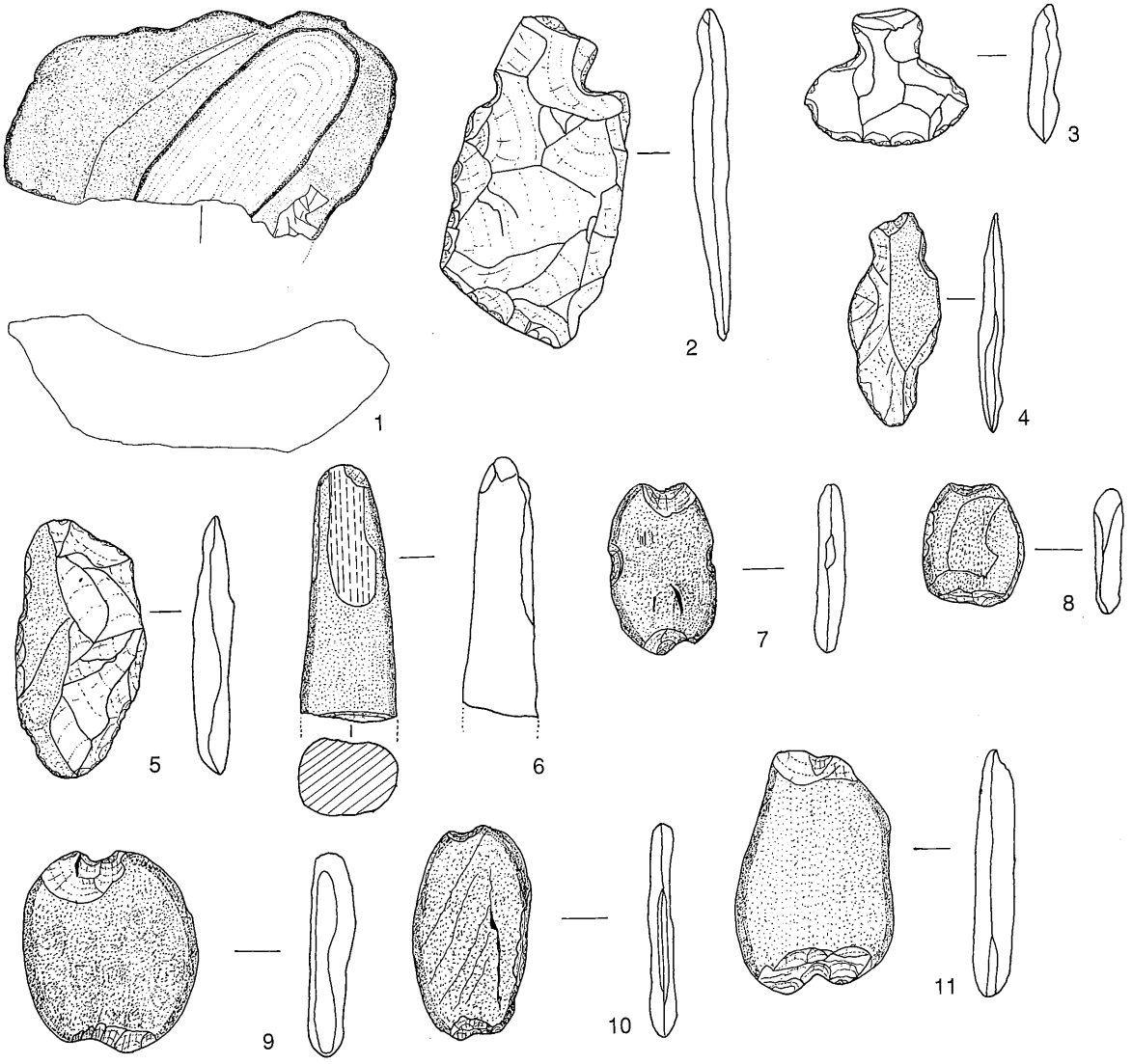
(11) は大きく内そぎ、外反する口縁部破片で、右側の口縁上部から２本の隆線によって、櫛形文風の区画を付け、その中に複雑多岐にわたる刻目文を全面的に付加し、文様を付ける際の大きな工夫が見受けられ、縄文中期中葉人達の美的感覚の高さに驚嘆させられる。(12～13) は太い縄文地に隆帯 (12) を、無文の隆帯 (13) をそれぞれ貼り付けてある。(13) は屈折底の一種とうかがえ、２片とも明茶褐色を呈し、焼成は良好である。

第９図に掲載したのは第５号住居址出土石器である。（１）は半分程度欠損しているが大型の石皿で、その凹みは深く、花崗岩製である。（２～４）は石匙であり、縦型（２、４)、横型（３）に分類化でき、なかでも（２）は特に大型に属している。（２、４）は硬砂岩製、（３）は頁岩製である。

（５）は硬砂岩を用いた撥形の打製石斧で、やや薄めである。（６）は乳棒状磨製石斧で、下端部は欠損してはいるが良品である。三峰川産の緑色岩の一種を用いている。

（７～８）は全般的に平坦な石錘であり、大型 (11)、中型（９～10)、小型（７～８）と細分が可能である。（７、９）は硬砂岩、（８、11）は粘板岩、(10) は緑色岩を用いている。一軒の住居址からこれだけの石錘が出土した例は極めて珍しく、よほど漁撈が盛んであったことがうかがえる。（７）は凹みが縦横の四個所に認められる。

特殊な遺物として土偶（第19図参照)、尖底の小型土器（第18図参照)、板状土製品（第20図参照）で別に述べるので、ここでは割愛する。



第９図　第５号住居址出土石器実測図　１（１：６）　２～11（１：３）

第６号住居址（第10図　図版３・５）

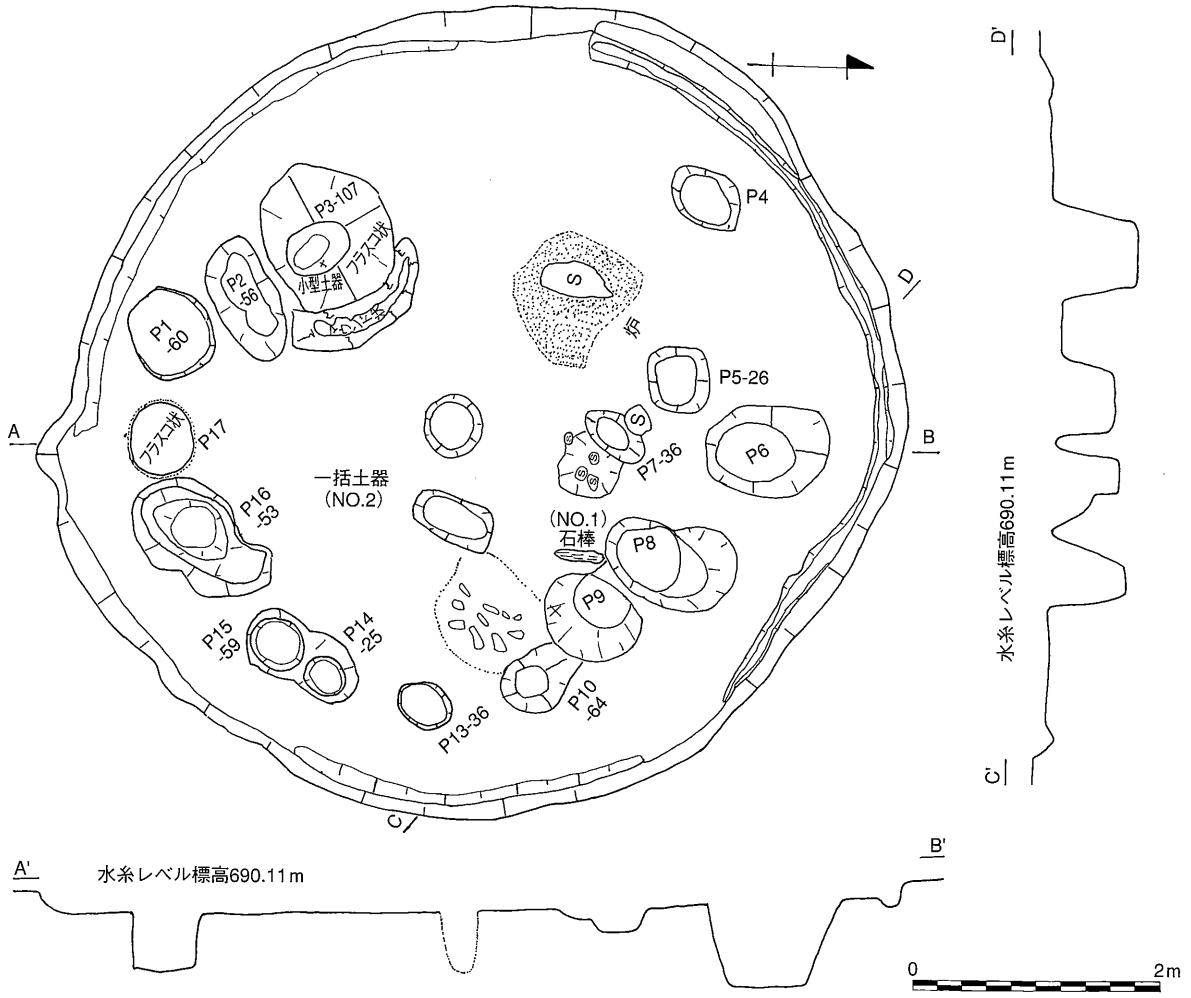
本址は第８号トレンチの最南端部に位置し、表土面より１m位下層のソフトテフラ層面を掘り込んで構築した竪穴住居址で、円形状プランを呈し、その規模は南北６m90cm程度、東西６m40cm程度を測る。壁高は30cm程度、その他の３面は10数cmと低い。この状態は今までに幾度も触れてきたが、土地改良事業時の造成によるものと判断してもよかろう。壁面状態は垂直気味で凹凸が多く、軟弱である。

床面は大般において平坦で、南半分は軟弱気味、北半分は堅くなっている。炉の周辺では特に堅く、しまりがあり、それから離れるに従ってしまりがなくなる傾向である。周溝はわずかな凹みで、全周しており、底面の凹凸は顕著であった。

炉は住居址の中央部より北側にあり、炉石が一個現存しているのみであるが、構築当初は石によって囲まれた石囲炉であったことが、床面の凹み状況から分かり、残存している石の周囲には赤々と焼土が多量に堆積し、一見して炉に利用された事実が判別できた。

柱穴は８本主柱穴と思われ、Ｐ３、Ｐ17のようにフラスコ状の断面を成している貯蔵穴の一種かと思われる。

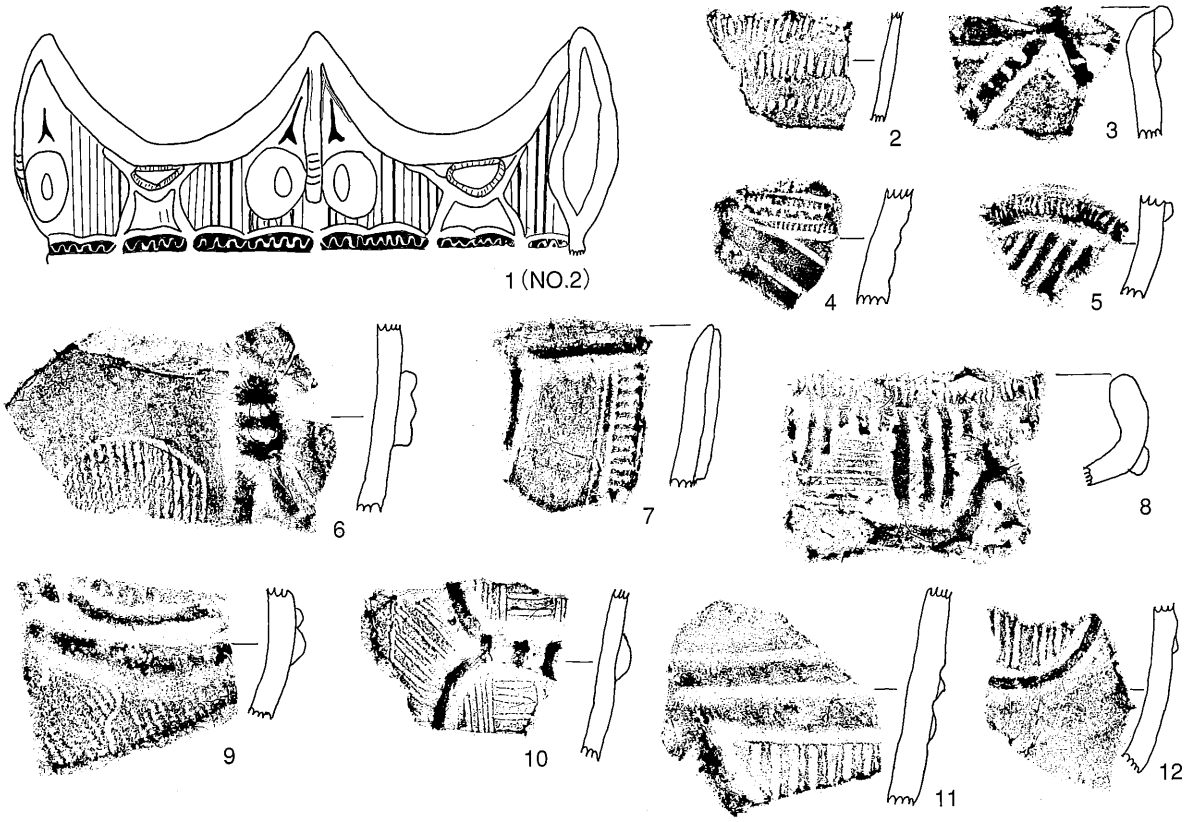
本址は出土土器より縄文中期中葉後半の信濃に於ける井戸尻式に属すると思われる。



第10図　第６号住居址実測図

第11図は第６号住居址出土土器実測図・拓影である。（１）は第10図中に（No.２）で表示した一括土器であり、伏った状態で出土した。口縁径44.8cmを測り、大きく波状を呈した口縁を成し、口縁下部以下は欠損してはいるが、想定するに、いわば大型の深鉢形土器である。太くて、高い隆帯が波状の突端部から垂下し、その両側には隆帯が渦巻状に巻き、ところどころに櫛形文風的な手法が見られ、井戸尻式の特徴をよく表現している。明茶褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石や雲母を含んでいる。

（２）は厚さが５㎜程度の薄手式に含まれ、無文地に三段にわたって連続刺突文を横位に規則性を保ちながら施文してある。文様の特色から見て縄文前期後半に関西地方で波及した北白川下層Ⅲ式の一派と想定され、後の飛び込みの可能性が強いように思われる。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含んでいる。



第11図　第６号住居址出土土器実測図・拓影　１（１：６）　２～12（１：３）

（３）はやや外反し、内そぎの口縁部破片であり、隆帯を斜状に配し、その上と両縁に連続刻目文を付けてある。黒褐色を呈し、焼成は良好である。（４）は無文地に沈線と刻目文を巧みに付け、文様に変化を持たせている。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。（５、12）は櫛形文風の一派であり、そのなかを隆帯に刻目（５）、無文のまま（12）に大別できる。二片とも赤褐色を呈し、焼成は良好である。

（６）は結節状の隆帯と磨消縄文風の手法が見られるもので、無文地の部分もかなりの広範囲を占めている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

（７）は無文地に平坦で大幅な隆帯を横位に、細目のそれを縦位に、沈線を縦位に、それらに直角状に接して連続刻目文を横位にそれぞれ施してあり、一つ一つの文様手法は単純ではあるが、全般的にみると文様のバランスはよくとれている。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。

（８）は大きく内反する口縁部破片で、口唇部はやや丸味状を成している。文様構成は無数の細い沈線を横位状に走らせ、その上に連続刻目文やソウメン状の粘土紐を貼り付け、一部分で突起状を成している。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。（９）は斜縄文地の上に、破片の上部には丸味状の太い隆線を２本貼り付け、中・下部に蛇行状沈線が垂下している。明茶褐色を呈し、焼成は中位である。

(10) は無文地にソウメン状の粘土紐をやや弧状に貼り付け、さらにその上に三個所にわたって小さな長方形状の貼付文を施し、その他の空間部には沈線を縦位、横位、斜め状に配し、不

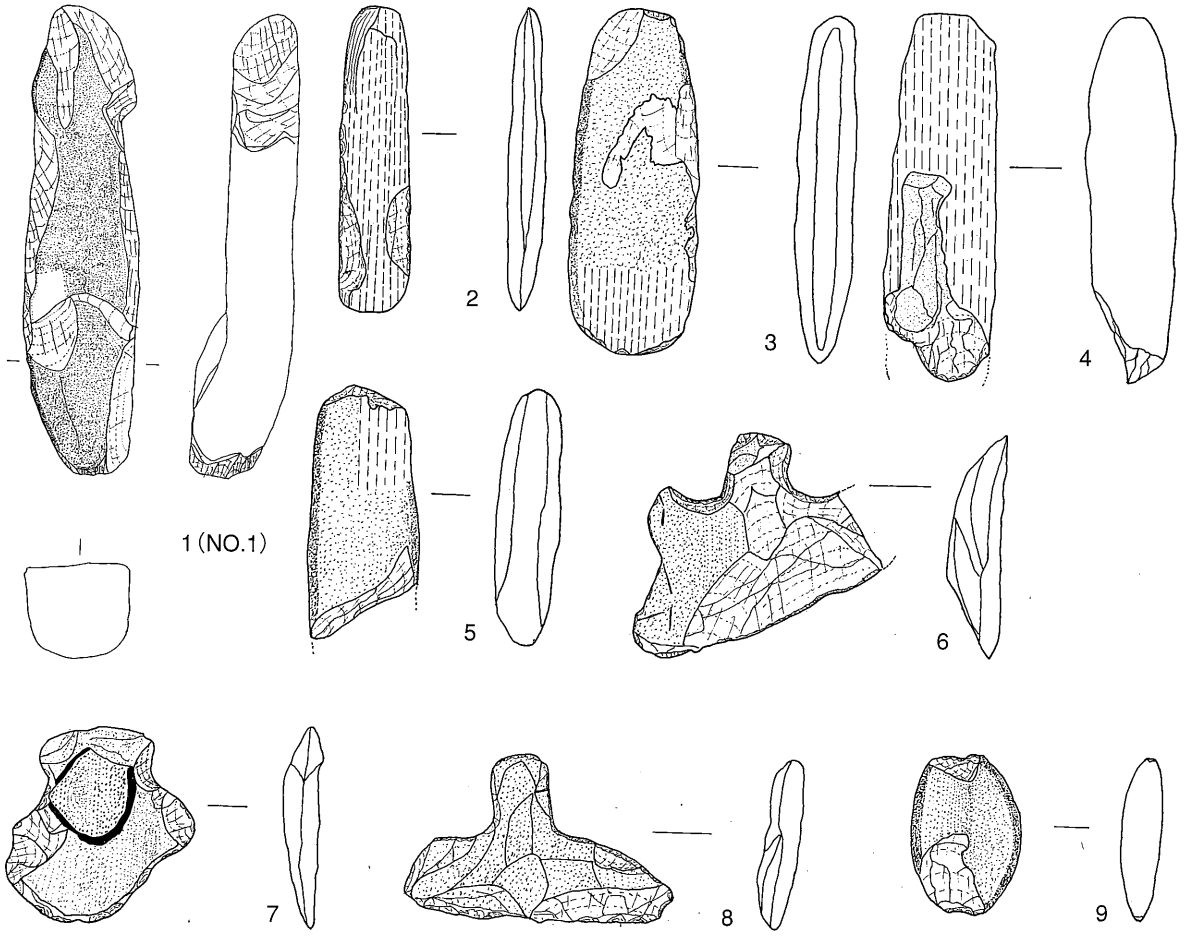
可思議な文様構成をしている。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。(11) は無文地に太くて平坦な隆帯を横位や斜め状に３本配し、最下部はそれによって櫛形文風的傾向を成しており、それらに沿って幅広で浅い沈線が付随している。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

（２）を除いた（１）、（３～12）は井戸尻式土器の一派と想定される。

第12図に掲載したのは第６号住居址出土石器である。（１）の出土地点は第10図に（№１）として表示してある。緑色岩製の石棒で、頭部の凹み、いわゆる應高様と呼ばれている部分が明瞭となっている。

（２～３）は定角式に近似した磨製石斧であり、双方とも刃部の鋭角度は高く、出来ばえは極めて良好である。（２）はやや小形で、クサビに利用されたのであろう。岩質は蛇紋岩（２）、緑色岩（３）である。（４～５）は乳棒状磨製石斧で、双方とも下端部は欠損してはいるが、出来ばえは普通であり、緑色岩を用いている。

（６～８）は縄文中期によく見られる横型の石匙で、３個とも硬砂岩を利用して製作している。なかでも、（６、８）は大型、（７）は普通の大きさであろう。（６）の右側端は大きく欠損しており、完全であれば、なお見事であっただろう。この石匙は「縄文中期農耕起源論」を展開するには不可欠な遺物として、現在、注目の的になっている。



第12図　第６号住居址出土石器実測図　１（１：６）　２～９（１：３）

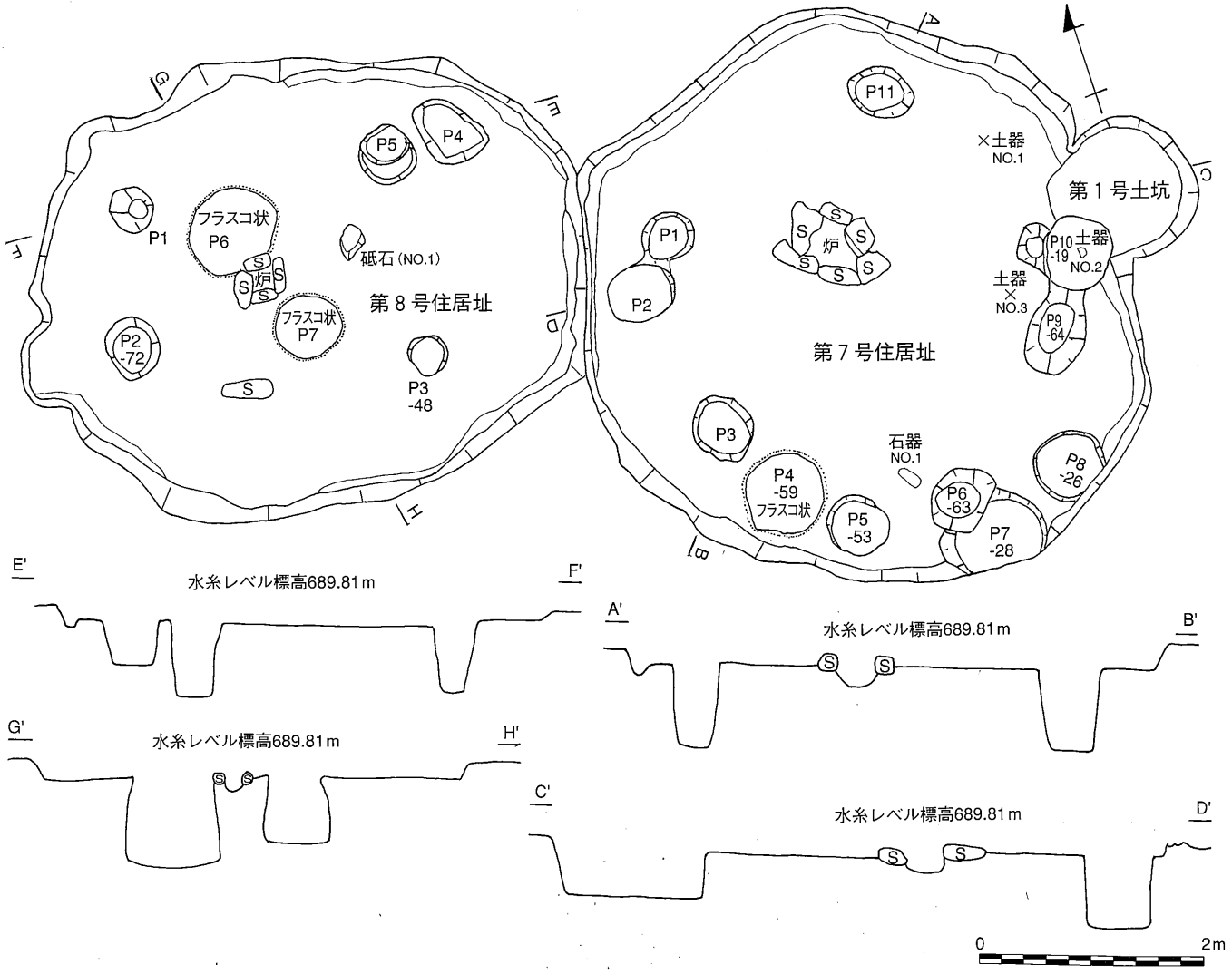
（9）は円礫状の石の上･下端部をそれぞれ打ち欠いて凹みを付けた石錘であり、粘板岩を用いているが、この岩質を使用することは珍しい。

第７号住居址（第13図　図版４～５）

本址は第７号－１トレンチ、第７号－２トレンチの南端部にまたがり、さらに、南側で第１号土坑、西側で第８号住居址に近接した状況下で、表土面より130cm程度下がったソフトテフラ層面を掘り込んだ竪穴住居址の状態で検出された。平面プランはところどころで角張ってはいるが、ほぼ円形状と捉えられ、その規模は南北４m80cm程度、東西４m95cm程度の数値に達する。

床面はやや軟弱で、全般的にはほぼ水平状態を成し、それとしてはあまり良好ではない。

周溝が北半分を回っているが、それの幅は10cm内外と狭く、さらに浅く、凹凸が多く、底面は軟弱であった。壁高は15～30cm内外の範囲に属し、外傾気味で、軟弱を呈し、凹凸が多くなっていた。主柱穴は６本であり、それらは割合に整然とした配列を成し、Ｐ４のようにフラ



第13図　第７・８号住居址　第１号土坑実測図

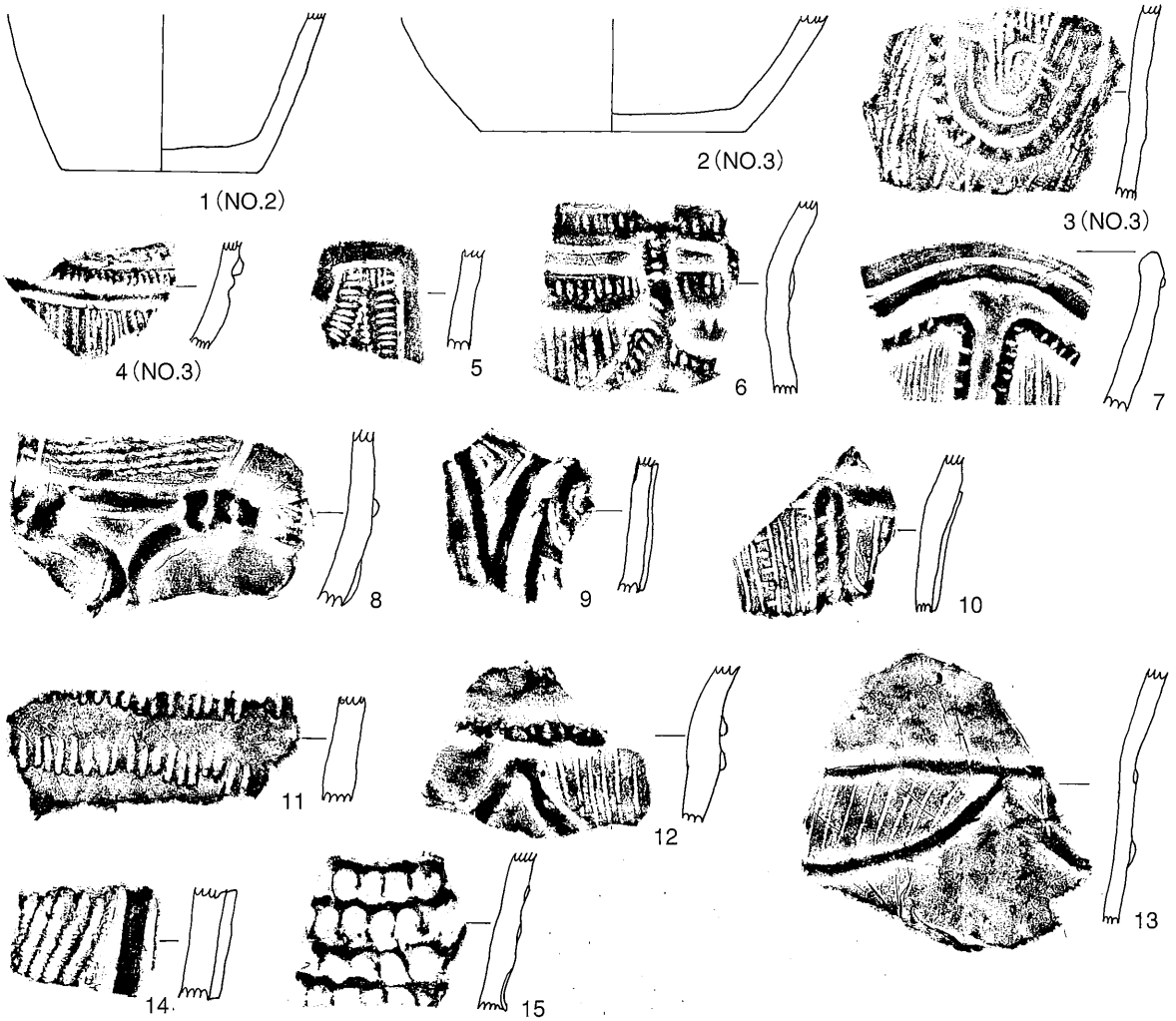
スコ状の形態のものは貯蔵穴の一種と考えられる。

炉は住居址の中央部付近に６個の河原石を整然と組み合わせて作った、いわば五角形状に近い石囲炉であり、その出来ばえ、残存状態は見事と言わざるを得ない。西側で第８号住居址とわずかに接している部分があるが、ここでは第８号住居址の一部分をほんのわずかに切っているような状況下であり、従って、第７号住居址は第８号住居址より新しいことになるわけである。

本址は出土土器より、縄文中期中葉後半の信濃地方でいう井戸尻式と想定できる。

遺　物（第14～15図）

第14図は第７号住居址出土土器実測図・拓影である。（１～２）は底部破片であり、底径7.9cm（１）、10.6cm（２）をそれぞれ測る。第13図に記載したNo.２（１）、No.３（２）はそれぞれの出土地点である。（３）は斜縄文を下地とし、破片中央部付近に幅広で、やや低めの隆帯をほぼ同心円状に３重にわたって渦巻状に回し、その内、最も外側の１本には連続刻目文を押捺し、さらに内側の２本は無文帯が展開している。この破片も第13図に記載した（No.３）に該当して



第14図　第７号住居址出土土器実測図・拓影（１：３）

いる。赤褐色を呈し、焼成は中位である。

（4）も（3）と同様に第13図に記載した（No.3）の部類に属している。横位の隆帯文の上に連続爪形文を刻し、その下に縦位状の沈線文が平行に走る文様構成である。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

（5）は沈線によって、縦位状区画文が形成されているもので、区画の中は連続状の刻目文が施されている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

（6）は幅広で、高い隆帯を器面全般にわたって施し、その上に連続的に刻目を付け、これによって眼鏡状の区画文を形成し、これらの中に櫛形文風の所も見て取れる。黒褐色を呈し、焼成は良好である。（7）は波状口縁を呈し、内そぎであり、隆帯を弧状や三角形状に配し、弧状の上は無文で、それに対し後者の上には連続的な刻目を付けてあり、これによって囲まれた中に縦位状の沈線が走向している。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

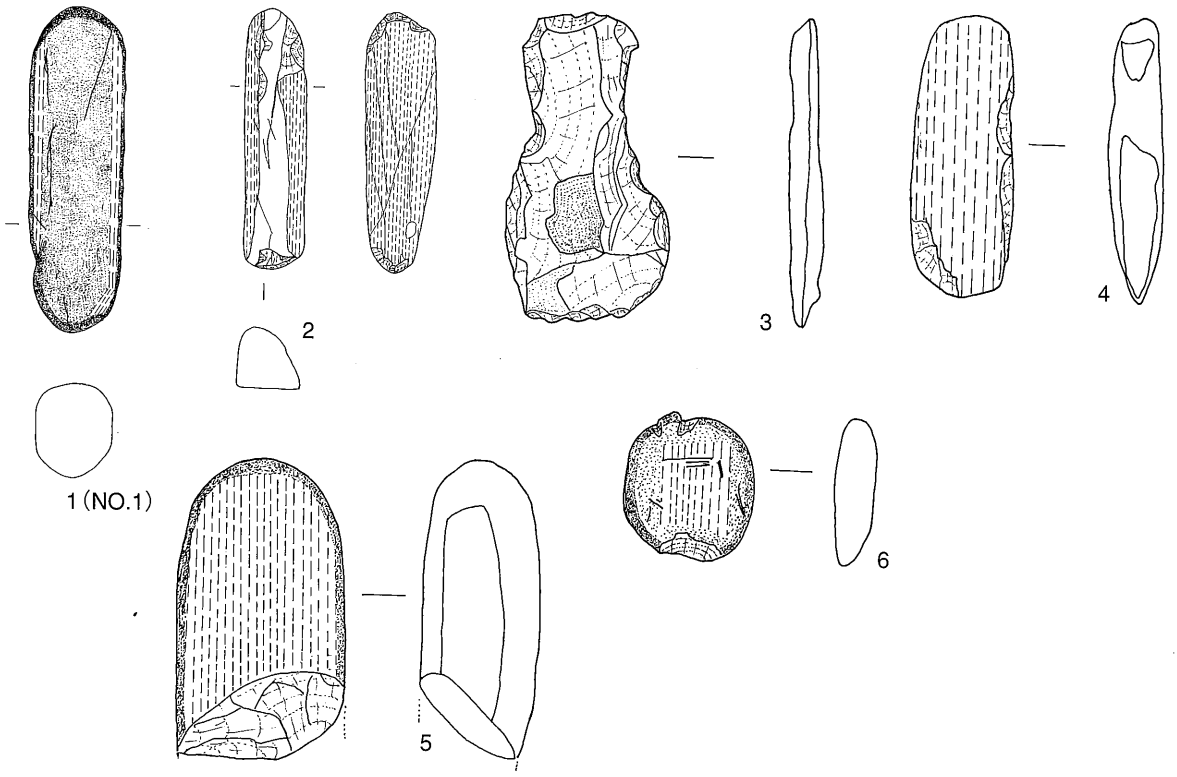
（8）は無文地に太い隆帯を三角形状に施し、その終末は両側で瘤状に突起している。赤褐色を呈し、焼成は良好である。（9～10）は隆帯と沈線が組み合わさったもの。両片とも明茶褐色を呈し、焼成は良好である。（11）は無文地に二段にわたって連続刺突文を配し、文様の変化を富ませている。茶褐色を呈し、焼成は良好である。（12～13）は櫛形文が明確なものであり、これを構成する隆帯に刻目（12）、無文（13）とに大別される。赤褐色（12）、明黄褐色（13）を呈し、焼成は良好である。（1～13）は縄文中期中葉に含まれると思われる。

（14）は太めの斜縄文地に太く、無文の隆帯が垂下しているもの。黒褐色を呈し、焼成は良好である。（15）は無文地に細い粘土紐を格子状に貼り付け、文様構成を意図的に成し遂げている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

第15図に掲載したのは第7号住居址出土石器である。（1）は第13図に掲載してあるうちで第7号住居址の（No.1）と表示した地点より出土した無頭の石棒で、硬砂岩を利用している。石棒としては加工の手は加えられていない。（2）は断面が三角形状に近い砥石で、よく使用されたとみえて、一面は極めて滑らかであり、緑色岩を用いている。（3）は極めて薄いが、下端部が大きく開く撥形の打製石斧で、周縁の剥離調整はよくゆきとどき、粘板岩の一種を用いている。これだけ薄いと、その用途について一考が必要かと思われるが、いかがなものか。（4）は蛇紋岩を用いた定角式磨製石斧であり、一方の断面は丁寧に磨かれているが、もう一方の断面は岩石の節理面が見受けられる。刃部は極めて鋭利であり、全般的に見て、美事な製品である。これだけ美事な製品の出土は数少ない実例であろう。

（5）の下端部は欠損してはいるが、その形態からみて、やや偏平な乳棒状磨製石斧の一種かと思われるが、硬砂岩を用いて磨製石斧として用途を成している実例は極めて数少ないものと思われる。

（6）はほぼ円形状の細礫の上端、下端をほんのわずかに打ち欠いて製作した緑色岩製の石錘であり、一般的な石錘と比較して極めて偏平状のところに特徴点を見い出し、これに関しても



第15図　第７号住居址出土石器実測図　１～２（１：６）　３～６（１：３）

一研究の課題が残る。

第８号住居址（第13図　図版４～５）

本址は東側で第７号住居址に切られ、南側は第６号住居址に隣接した位置に検出された。表土面より１m30cm程度下のソフトテフラ層面を掘り込んで構築した竪穴住居址で、その規模は南北４m15cm程度、東西４m85cm程度の規模を有し、平面プランはところどころで凹凸はあるが、東西にやや長い長円形状を成している。

床面はソフトテフラ上層面に構築され、大半が平坦で堅く、叩かれている。東側半分位の位置に幅、深さがともに10cm内外の周溝が回っているが、その壁面の凹凸は顕著で周溝としての機能を果たせたのか疑問が残る。

壁高は20cm程度と低く、軟弱で、凹凸が多くあり、やや悪い状態である。４本主柱穴の典型的なタイプと考えられ、それはＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ５であろう。炉に近接しているＰ６、Ｐ７は断面フラスコ状で、いわば貯蔵穴に利用されたものであろう。

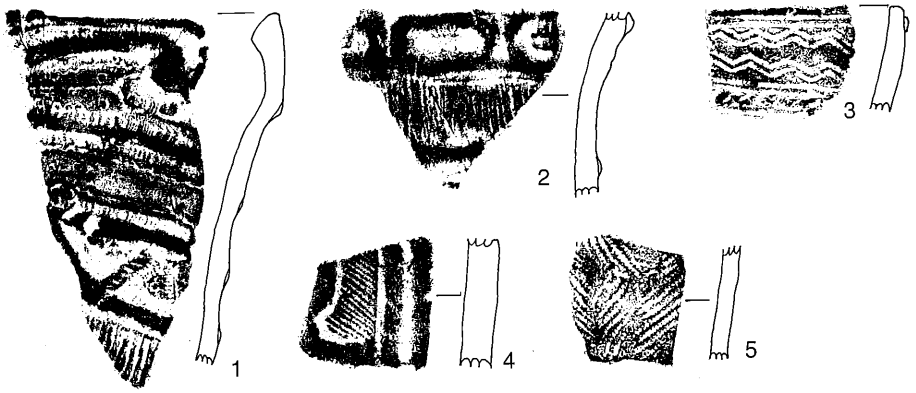
炉は住居址の中央部付近に存在する極めて丁寧に小さな石を組み合わせて作り上げた方形石囲炉で、それの大きさから見てもある程度の住居址の時代決定は可能であると思われる。

本址は縄文中期中葉前半、信濃地方で言っている新道式の住居址と思われる。

遺　物（第16～17図）

第16図は第８号住居址出土土器拓影である。（１）はやや外反し、口唇部が内そぎの深鉢型土器である。文様は極めて複雑多岐にわたっているが、部分的に述べてみる。まず、横位隆帯文

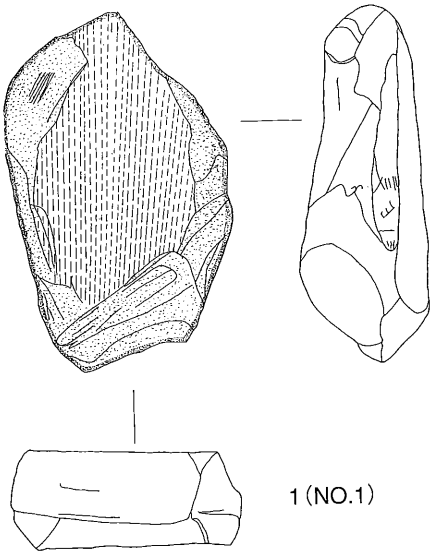
が４本入り、上部の１本目の結末は瘤状に突起している。３本目と４本目は隆帯によって三角形状文が構成され、全ての隆帯の縁に連続爪形文が深く刻み込まれている。破片下端部のわずかな部分に、断面が鋭角状の細沈線が施され、文様効果が倍増されている。この土器は縄文中期中葉の前半である関東の阿玉台式、信濃の新道式の特徴をよくかもし出している。黄褐色を呈し、焼成は良好である。



第16図　第８号住居址出土土器拓影（１：３）

（２）の上部文様は隆帯を横に長く付け、その内側に連続爪形文を深く刻み込む。中部文様帯は細沈線を垂下させ、下部文様帯は横位隆帯の下側に連続爪形文をそれぞれ深く彫り込み、文様の変化が顕著である。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

（３）は無文帯の中に横位の直線状沈線や波状沈線を走向させてあり、割合に簡略化された文様で、いわゆる平出３Ａ式の特徴をよく表現している。赤薄褐色を呈し、焼成は良好である。



第17図　第８号住居址出土石器実測図（１：６）

（４）は縦位状区画文のよく発達した土器片であり、沈線と、隆帯を意匠的に組み合わせてある。赤褐色を呈し、焼成は良好である。（１～４）は縄文中期中葉前半の土器片であろう。（５）は器面一杯に羽状縄文が見られ、かつ、薄手という特徴からみて、縄文前期後半に信濃地方へ波及してきた関西地方を源とする北白川下層Ⅲ式の一派と思われ、土地改良事業造成時に第８号住居址の覆土中に飛び込んだものと思われる。

第17図の（１）は第13図中で第８号住居址（No.１）の地点より出土した緑色岩製の大型の固定式の砥石であり、全面的によく研磨されている。この砥石によって多くの磨製石器が製作されたものと思われる。

第１号土坑（第13図　図版４）

本遺構は第７号住居址の北東部分で、同じ住居址を切り込んで構築し、平面形はほぼ円形状であり、壁面の状態は急な立ち上がりを示し、底面はほぼ平坦で堅い。現状の規模はおおよそ次のようである。

南北１m25cm、東西１m30cm、深さ60cmを測定可能である。

遺　物

遺物は何も出土していないが、周辺の状況からみて本遺構は縄文中期中葉と思われる。

（飯塚政美）

（２）特殊な遺物（第18～20図　図版７～８）

（ａ）小型土器（第18図　図版７～８）

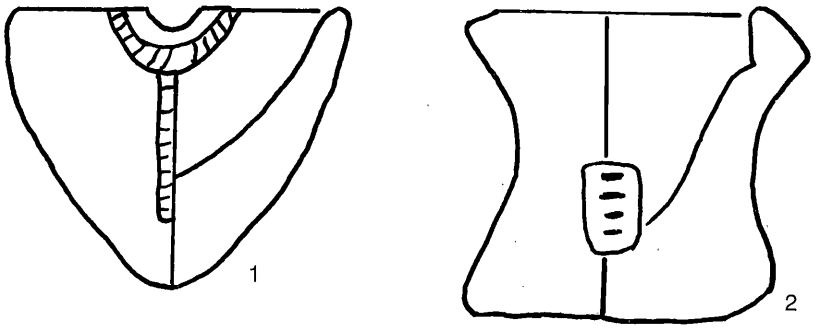
（１～２）はいわばミニチュア土器の仲間である。（１）は第７図の第５号住居址実測図にその出土地点を明示してあり、この地点は炉内の上層部に含まれる。口縁径4.6cm程度、器高3.7cm程度を測る片口を持つ完型品で、尖底状を成している。文様は大部分が無文帯を成しているが、実測図に表現したように、ほんの一部分だけに文様をつけてある。

それは口縁上部から下に向かって半円形状の連続刺突文を、口縁下部から底部にかけて３mm程度の極めて狭い幅で、連続刺突文を懸垂状に垂下させてあり、前述した半円形状の連続刺突文が描かれている範囲の中央部付近の口唇部に小さな口を付け、何かを注げるようにしてある。

発掘調査時にこの土器につまっていた土の中に多量に炭化物が混入しており、出土した地点から見て何か発火用に使用したのではないか。いずれにしろ、縄文中期中葉に尖底土器が出土したことは極めて不可思議である。

後日、この土器に水を一杯にして注いでみると、極めて良好に水滴がポツリ、ポツリと雫が落下するような状態を呈し、このことは、発火用の油か、何かをこの土器の中に入れておいたのではないか。類例がないので残念ではあるが、今後の出土事例が待たれ、それとともにその用途が解明できるのではないか。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

（２）は第10図第６号住居址実測図に出土地点を表示してある。大分欠損しているが、図上復元によると口縁径4.5cm程度、高さ4.1cm程度、底径4.1cm程度をそれぞれ測定でき、（１）に反して平底を呈する。無文帯が大部分を占めており、その中にほんの小さな隆帯を懸垂状に貼り付け、その上にある程度の間隔を保ちながら刻目を押捺してある。底部は異なるが（１）と酷似しているようである。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

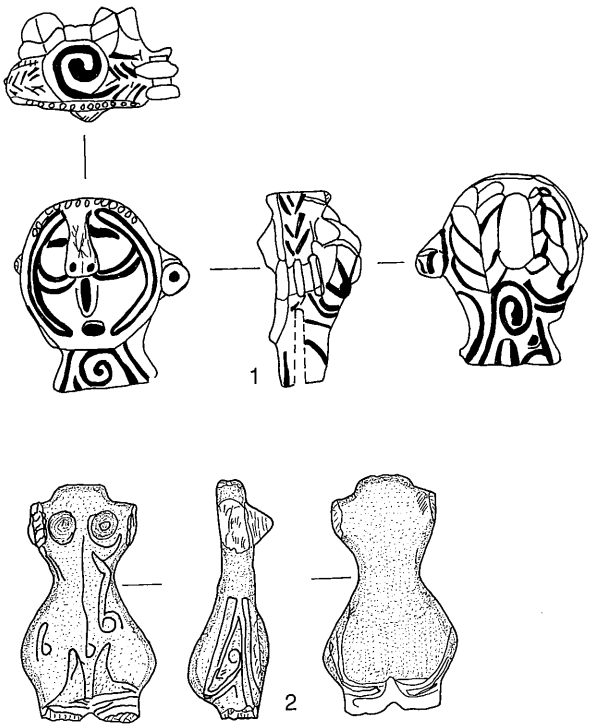


第18図　小型土器実測図（１：１）

（ｂ）土　偶（第19図　図版７～８）

（１）は第４図第３号住居址実測図に出土地点を明示し、顔面部だけ残存している土偶であり、

その部分、部分の諸特徴を列記すると次のようになる。顔面は直径5.5㎝程度で、正円形状に近く、周囲はやや太めの隆線と２本の細い沈線とによって大きく区画されている。頭頂部は細い隆線を螺線状に表現してあり、これは蛇がとぐろを巻いた状況を具象化したものと思われる。



第19図　土偶実測図（１：３）
（１　第３号住居址、２　第５号住居址）

眉毛は粘土紐を平坦に貼り付けてわずかに誇張されている。目は柿の種状の凹みにて表現しており、右目は平らに、左目はやや左垂れ状にしてある。目の下から頬にかけて文身に見立てた沈線が鼻を中心にして左右対称にくっきりと刻み込まれている。鼻筋はきちんと通り、その頂はやや平坦化し、刺突文風に二つの鼻孔を穿けてある。右耳は欠損、左耳に耳栓（現在のピアスのようなもの）をはめ込み、その上を部分的ではあるが、髪が覆いかぶさっている。

後頭部は髪の毛を非常に美しく三つ編み状に表現してあり、今後、髪形の変遷史に大きく貢献するであろう。髪の形状より見て、女性の姿であろう。顔面の下部から上に向かって途中まで穴を穿けた一種の中空土偶の仲間であろう。全般的に見て、本土偶は縄文中期中葉に位置づけられると思われる。黒褐色を呈し、焼成は良好で、出来ばえは誠に見事と言わざるを得ない。

（２）は第７図第５号住居址実測図にその出土地点を表示し、頭部、両手、両足は欠損してはいるが、現長9.5㎝程度を測る出来ばえが見事な土偶である。表面の胸部を二個所、突起状に盛り上げてあり、女性の乳房を誇張化している。腰部はくっきりとつぼまり、出尻状態を呈している。腰部から臀部にかけて細い沈線にて渦巻状や、三角形状の文様構成をしている。

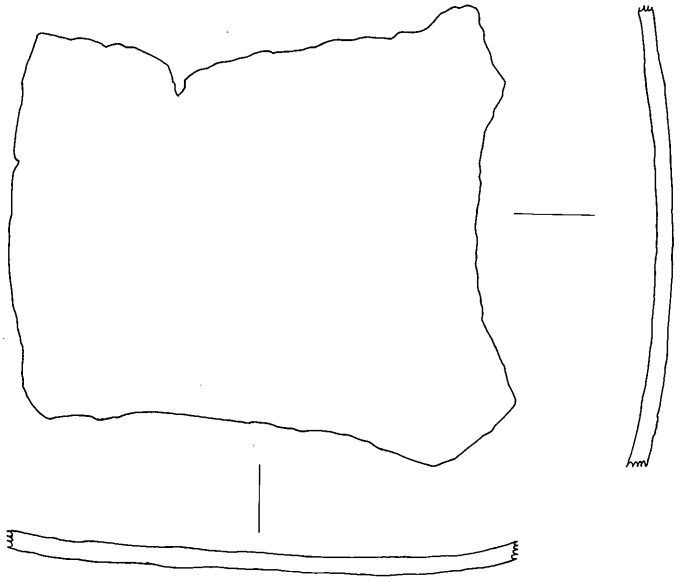
断面図で見ると一目瞭然であるが、臀部は３㎝程度とかなり厚く、細い沈線を渦巻状に付け変化に富ませている。一方、裏側は無文地が全面を覆っている。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

板状土製品（第20図　図版７～８）

第７図第５号住居址実測図に表示してあるように炉内の覆土上層面により、また第18図（１）の小型尖底土器に接して出土し、厚さは６㎜程度を測る。実測図の断面に表示したように、その曲線の状態から見て、とても土器の破片とは考えられず、むしろ板状を呈する。よって、「板状土製品」と命名したわけである。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

大凡な想定ではあるが、第18図（１）の小型土器は尖底であるので、この板状土製品の上に

常設していたのではないだろうか、いわばセットとして使用したのではないだろうか。類例の出土が待たれる次第である。（飯塚政美）



第20図　板状土製品実測図（１：３）
（第５住居址炉内出土）

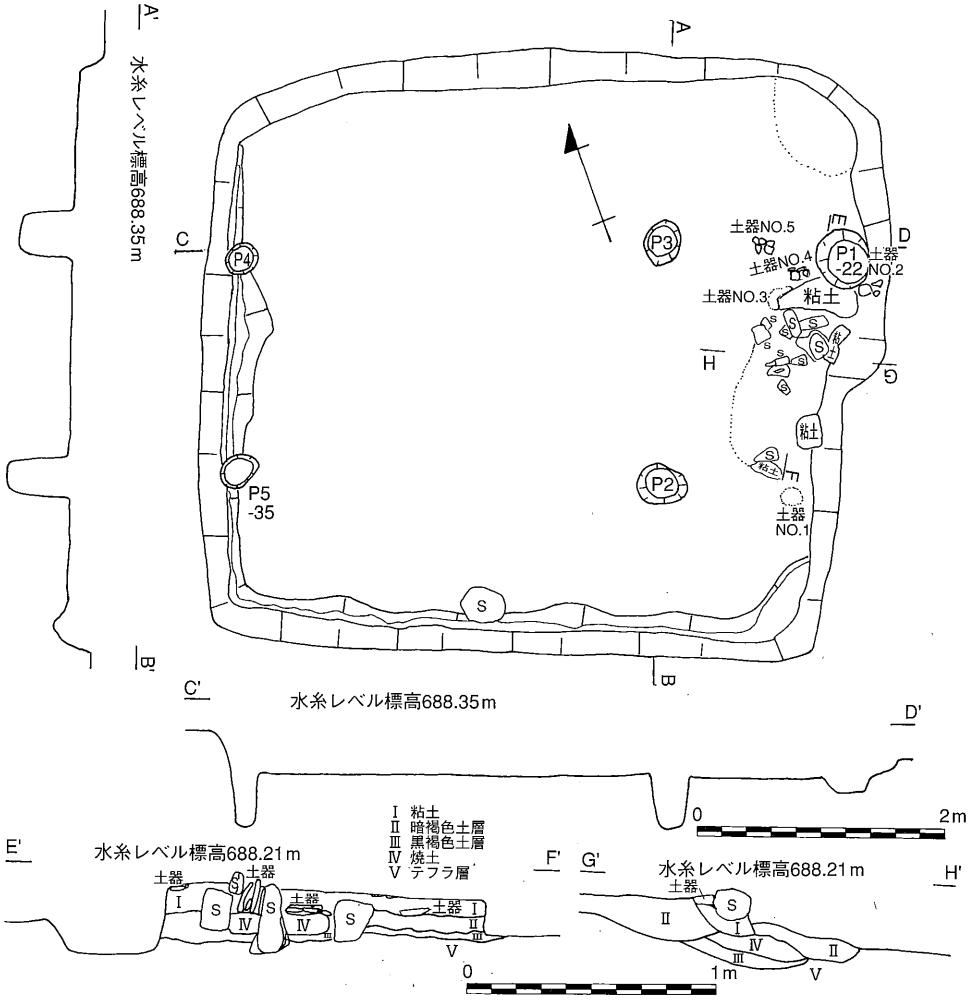
（３）平安時代の遺構と遺物

第１号住居址（第21～22図　図版４・６）

本址は第４号トレンチの最南端部に検出され、表土面より70cm程下層のソフトテフラ層面を掘り込んで構築し、部分的に凹凸はあるが、全般的には隅丸方形状を呈する竪穴住居址である。規模は南北４m45cm、東西５m45cm程度が測定可能であり、その規模としては、ごく一般的である。

床面は西側の半分は堅く凹凸が多いのに対し、東側半分は堅く、平坦である。このことは竈が東壁中央部付近に構築され、生活自体が竈を中心にして営まれたための現象であろう。

壁高は北側は低く、25cm程度、西は高くて50cm程度であり、四壁



第21図　第１号住居址・竈実測図

ともやや外傾気味で、凹凸があり、軟弱であった。南壁直下から西壁直下にかけて、幅10～20cm程度の周溝が巡っていたが、その状態は凹凸が顕著であり、周溝としては出来ばえは極めて悪かった。４本主柱穴で、P_4、P_5は母屋柱的用途を成していたのであろう。

竈は東壁中央部付近に構築された石芯粘土竈であり、煙道は不明で、焼土の堆積は少なく、両袖石はしっかりしていた。

出土した土師器のカキ目痕文様より、本址は平安時代中期頃と想定される。

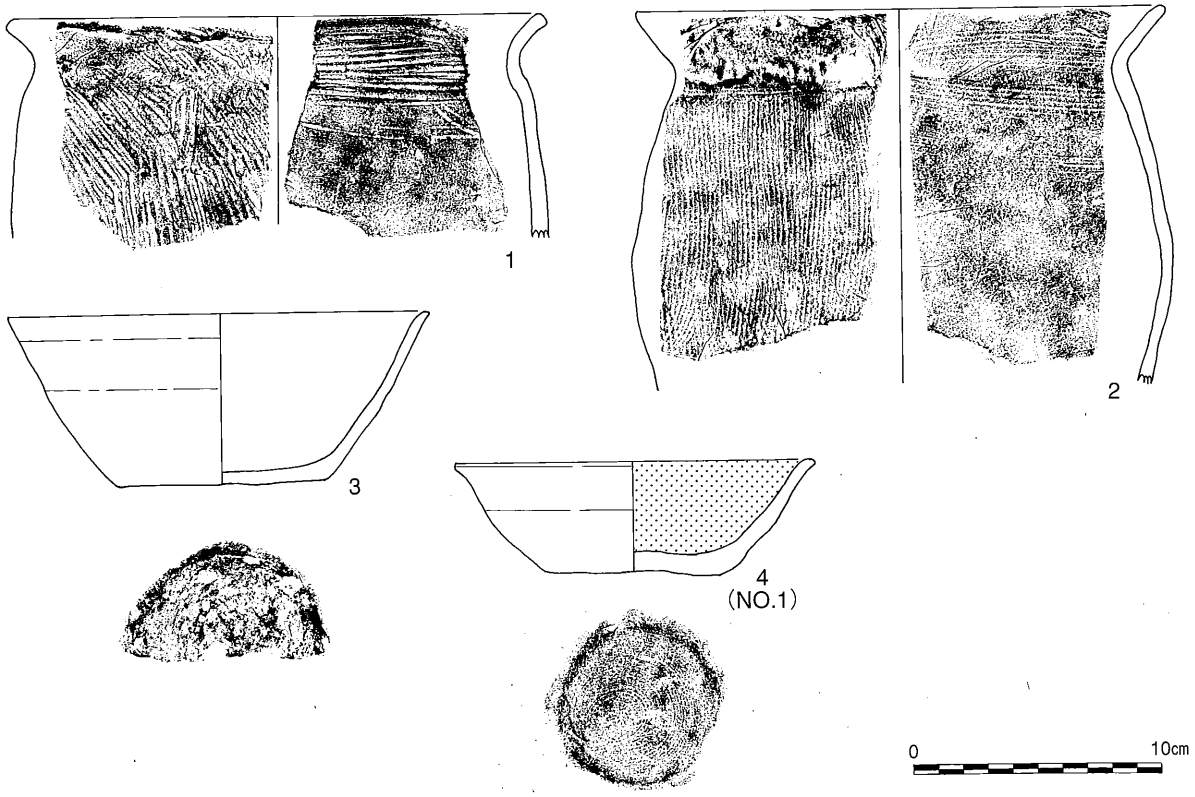
遺　物（第22図　図版７）

（１～４）は土師器であり、その内、口唇部が大きく「くの字状」に外反し、底部が欠損している長胴甕（１～２）であり、（１）の口縁径は11.6cm程度、（２）のそれは21.1cm程度を測り、内・外面ともにカキ目痕がよく描写されている。双方とも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

（３）は図上復元ではあるが、口縁径16.8cm程度、高さ6.9cm程度、底径8.3cm程度を測り、口縁はやや外反し、底部はわずかに糸切り痕を認める。茶褐色を呈し、焼成は良好である。（４）は第21図第１号住居址・竈実測図土器（№１）の地点から出土した完型品で、口縁径14.3cm程度、高さ4.4cm程度、底径7.1cm程度を測り、口縁は大きく外反し、胴部がやや張り出し気味で、内黒でよく研磨され、糸切り痕が明瞭であった。茶褐色を呈し、焼成は良好である。（１～４）は国分期で、平安時代中期頃に位置づけられよう。

第４号住居址（第23～24図、図版４・６）

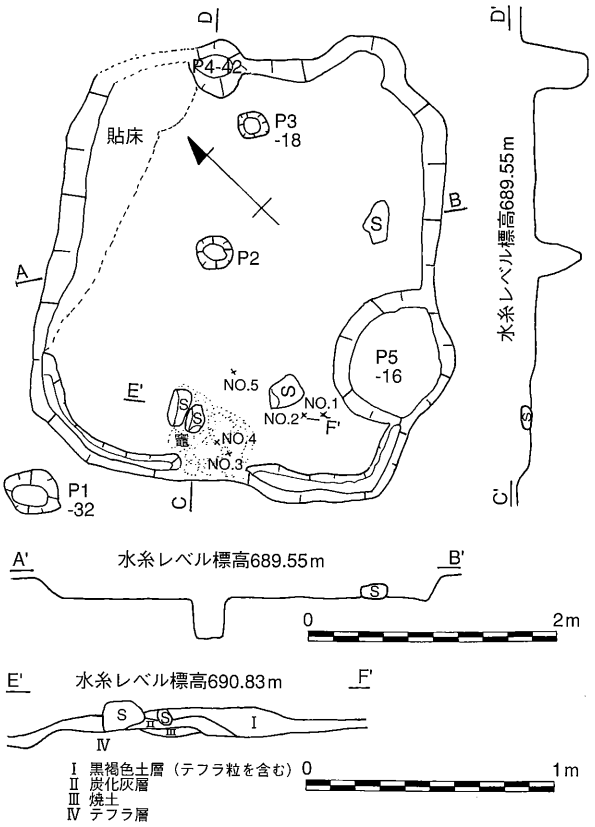
本址は北側で、一部分、第５号住居址の上に貼床をして本址の北壁を構築してある。表土面



第22図　第１号住居址出土土器実測図

より65cm程下層のソフトテフラ層面を掘り込んで構築し、若干の凹凸を認めるが、全般的には隅丸方形状を呈する竪穴住居址である。規模は南北３m35cm程度、東西３m70cm程度と極めて小型化を呈し、その点では、時期的に見て第１号住居址と大きな相違点である。

壁高は15～30cm程度と低く、垂直に近く、良好である。床面は部分的には凹凸があるが、ほぼ平坦で堅い叩きになっている。北西隅、南西隅の二つの壁面直下にわずかに周溝が見られ、住居址としての面目を保っていた。柱穴は５個所発見されたが、そのうち、大きさ、深さから見て、Ｐ５は灰捨場であろう。なぜならば、中から若干ではあるが、焼土が検出されたからである。竈は西壁中央部付近に作られた石芯粘土製であり、その残存状態は悪い。芯に利用したのは、三峰川産の一抱え程の緑色岩である。本址より平安時代中期頃の土師器坏、須恵器、灰釉陶器耳皿が竈の南西近くより出土している。よって本址はこの頃と想定される。



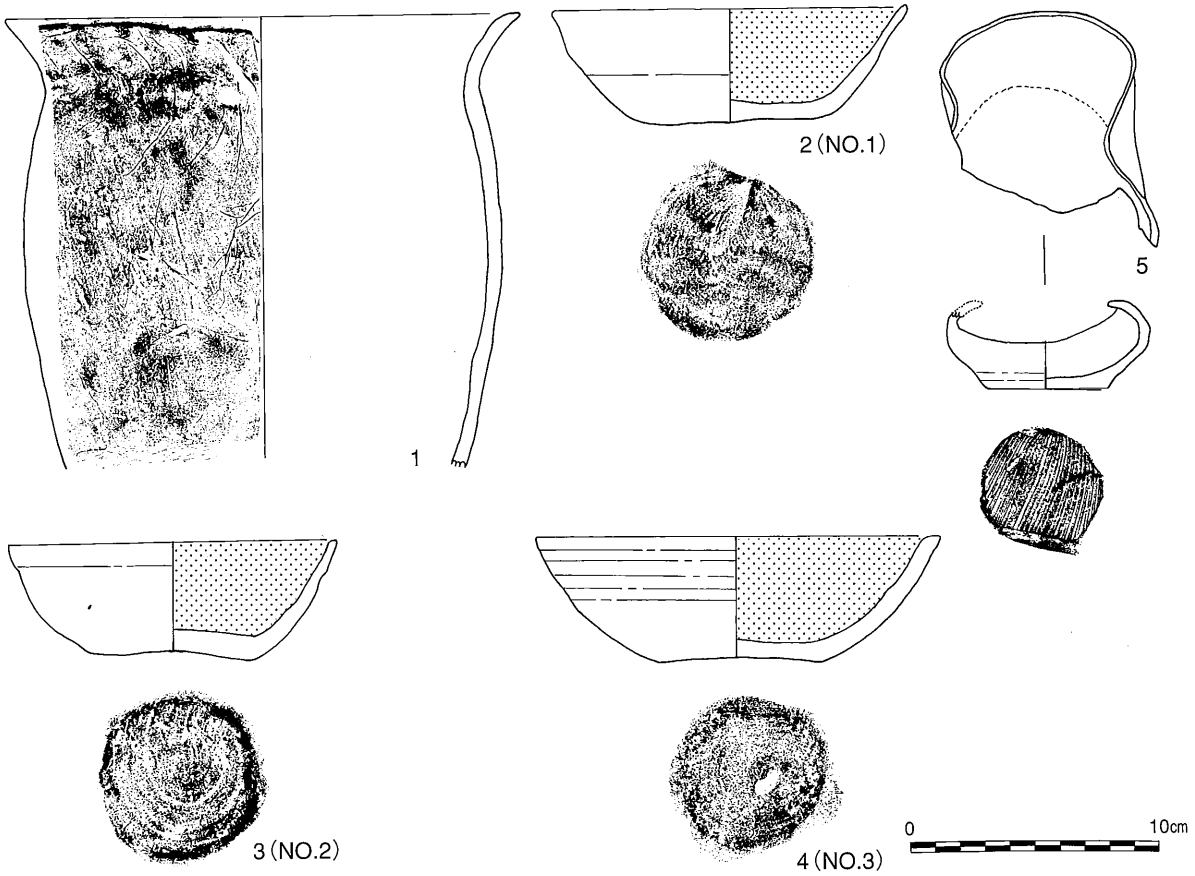
第23図　第４号住居址・竈実測図

遺　物（第24図　図版７～８）

（１）は胴下部から底部は欠損しているが、大きく「くの字状」に外反する土師器長胴甕で、口縁径21.5cm程度を測り、外面に浅いカキ目痕が見られる。茶褐色を呈し、焼成は良好である。（２～４）は土師器内黒の完型品坏であり、外反し、３個とも糸切り痕が良く見られる。（２）は口縁径14.1cm程度、高さ4.6cm程度、底径7.7cm程度、（３）は口縁径13.1cm程度、高さ4.4cm程度、底径6.5cm程度、（４）は口縁径16.1cm、高さ4.3cm程度、底径6.4cm程度をそれぞれ測る。（２）は第23図のNo.１、（３）はNo.２、（４）はNo.３の地点よりそれぞれ出土している。３個とも茶褐色を呈し、焼成は良好である。（１～４）は平安時代中期頃の所産であろう。

（５）は一部分が欠損してはいるが、図上復元が出来る灰釉陶器耳皿であり、口縁径7.1cm程度、高さ1.9cm程度、底径3.9cm程度を測り、糸切り底を呈する。平安時代中期頃の製作と思われる。

（飯塚政美）



第24図　第４号住居址出土遺物実測図

第Ⅳ章　所　　見

今泉遺跡は前に幾度も触れているように、縄文早期から平安時代の複合遺跡として各種の出版物・研究資料によって古くから有名であった。そして、今回の発掘調査においても、その主体は縄文中期と平安時代中期であり、相当量の遺物とともに前者の時期の竪穴住居址６軒、土坑１基と、後者の時期の竪穴住居址２軒が検出された。

それらは縄文中期中葉の前半から後半の時期まで、信濃の編年で考えるならば、新道式、藤内式、井戸尻式であった。これらを関東編年にあてはめるならば阿玉台式、勝坂式に該当するのであろう。一方、今回出土した平安時代中期頃の遺物は関東地方の編年では国分式に含まれこれは土師器としては最も新しい位置づけがなされている現状であり、従って、伴出遺物として須恵器や灰釉陶器も見受けられる。主体を占める縄文中期の土器は、その出土数には大差があったが、中期の各時代に及び、縄文前期後半の北白川下層Ⅲ式や縄文晩期土器が混在的に出土した。特に、前者の土器は文化的交流を顕著に現している姿であろう。

縄文中期中葉６軒の竪穴住居址の主たる特徴について記してみよう。

これらの内、道路用地の関係上で完掘出来たのは４軒だけであり、残り２軒の内、１軒はほ

んのわずかの調査、もう１軒は８割程度の調査に留まった。平面プランは円形状が５軒、第５号住居址のように後での拡張のため、全体像は卵形状を呈しているのも認められた。壁高は構築時には高かったと想定されるが、土地改良事業導入のために破壊されたとみえて、全般的には低く、あまり良好ではなかった。炉は５軒、その存在位置が確認された。その内で、完全に石囲炉の形態を保持していたのは第７号住居址、第８号住居址の２軒のみであり、その他３軒は、いわば炉石に使用されていた残骸と焼土のみに留まっていた。全般的にみて、６軒の住居址は縄文中期中葉の井戸尻期に該当すると思われる。

平安時代中期２軒の竪穴住居址の主たる特徴について記してみよう。

この２軒は完掘できたが、第４号住居址のように貼床をして新たに住居址を構築したために、壁高が不明瞭な部分も認められた。平面プランは２軒とも隅丸方形状であり、その規模は第１号住居址では極、一般的な大きさ、第４号住居址は小型の部類に含まれている。

壁高は第1号住居址では土地改良事業の実施があまりなされていなかったと見えて、かなりの高さを保っていたが、一方、第４号住居址は低かった。柱穴の配列は第１号住居址では４本整然と配列されており、その内の２本は母屋柱的な存在価値を有しており、十二分に柱穴の役目を果たしていたと思われる。第４号住居址の柱穴は漠然とした状態であった。このことは住居址の大きさにも大きく影響されているのであろう。

縄文中期中葉の竪穴住居址より出土した「特殊な遺物について」

これに関しては本報告書の第18図から第20図にかけて述べてある。第18図に掲載した小型土器は一般的にはミニチュア土器と呼ばれている一派であり、縄文後期には相当量の出土が見受けられるが、縄文中期の出土例は極めて少ない。同図の（１）は前述しておいたが、尖底であり、縄文中期に尖底土器の存在が認められた実例の一つとなった。これに関しては、第20図の板状土製品とセットで出土しており、二つとも何か密接な関連性があると想定される。

出土地点が炉内である面からして、発火用の油を入れておいたのではないだろうか。いずれにしろ、今後、類例の出土を待って、さらなる研究を深めていかなければならない。

第19図の土偶２点のうちでも（２）に関連しては類例品が見られる現状ではあるが、（１）の三つ編み状髪型土偶の出土例はほとんど目にしたことがなく、今後の出土例が待たれる所であり、髪型の変遷史及び土偶研究史に必要不可欠な好資料を提供してくれた。

平安時代中期頃の竪穴住居址より出土した遺物について

第１号住居址、第４号住居址の２軒より出土した遺物はカキ目痕の明瞭な国分期の土師器である。灰釉陶器耳皿は10世紀前半頃の所産で「令制東山道」を利用して美濃地方より搬入されたのであろう。広範囲の調査を実施すれば、大集落址の存在が明確化することは事実であり、今後、この周辺での諸開発に関しては常に目を光らせて、対応していかなければならない大きな命題を投げ掛けてくれたことは大変に有意義な事実であった。（飯塚政美）

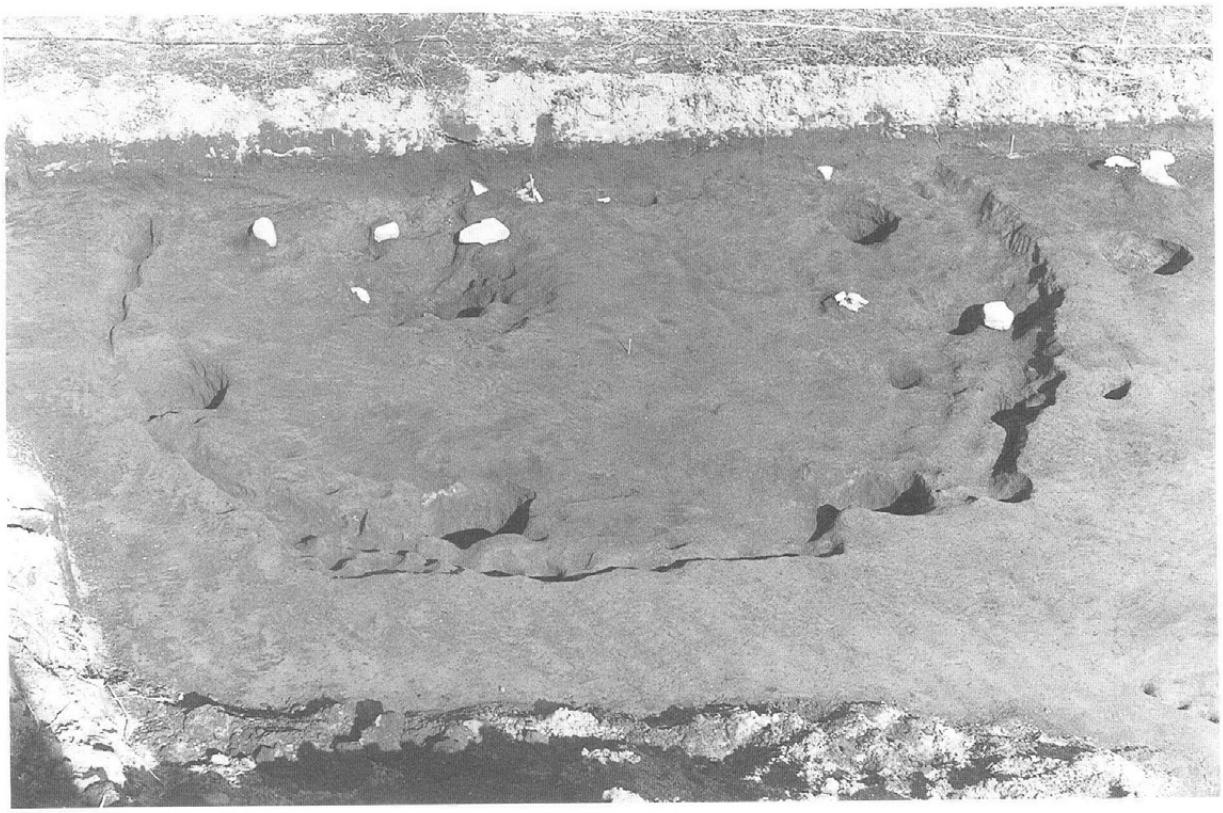
図版1　遺跡遠景

遺跡地を南東より眺む

遺跡地を北東より眺む

図版2　遺構

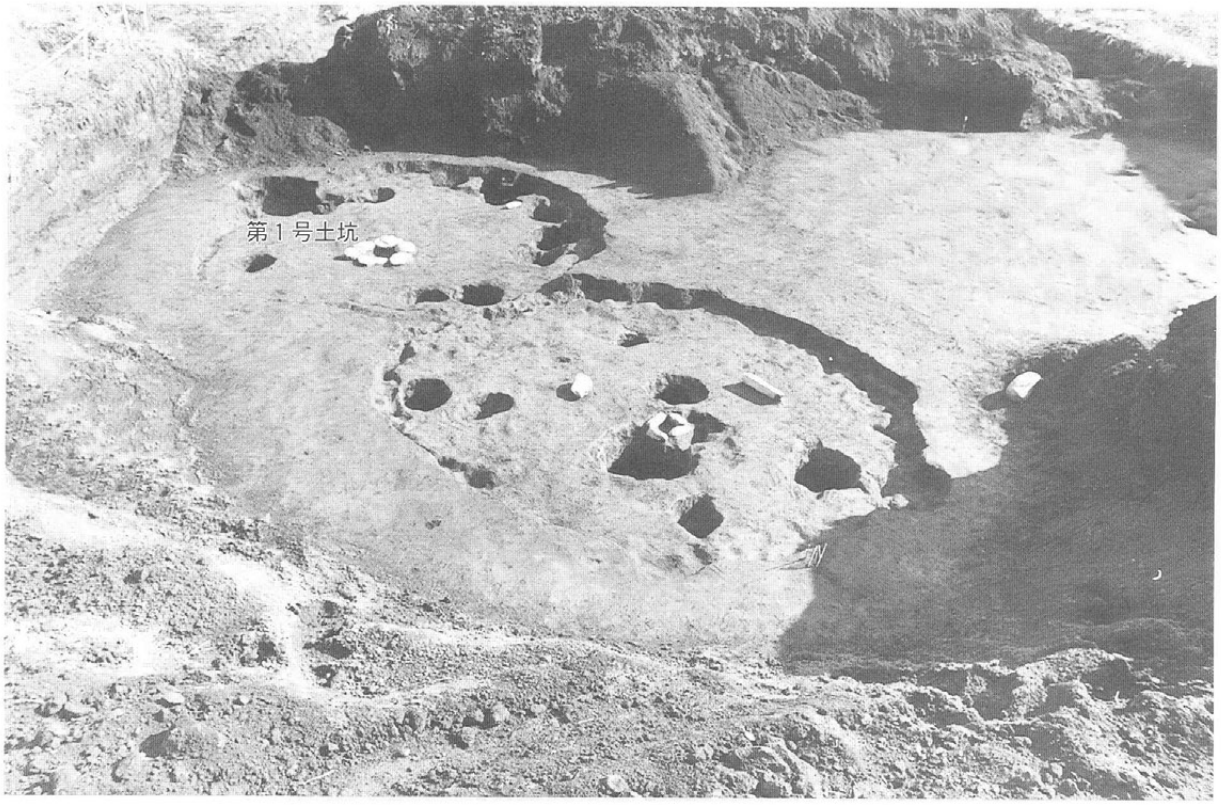
第2号住居址



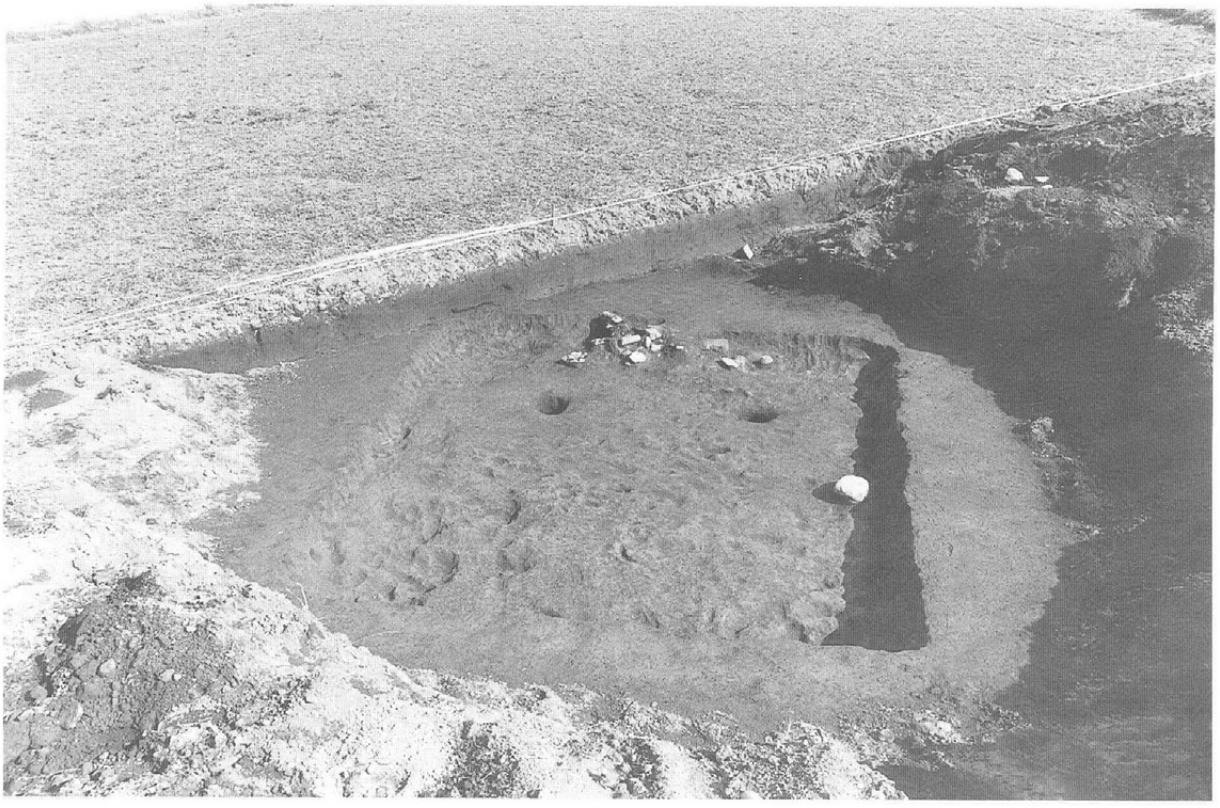
第3号住居址

第4号住居址（奥左上）・第5号住居址（手前）

第6号住居址



第7号住居址（奥上）・第8号住居址（手前）・第1号土坑

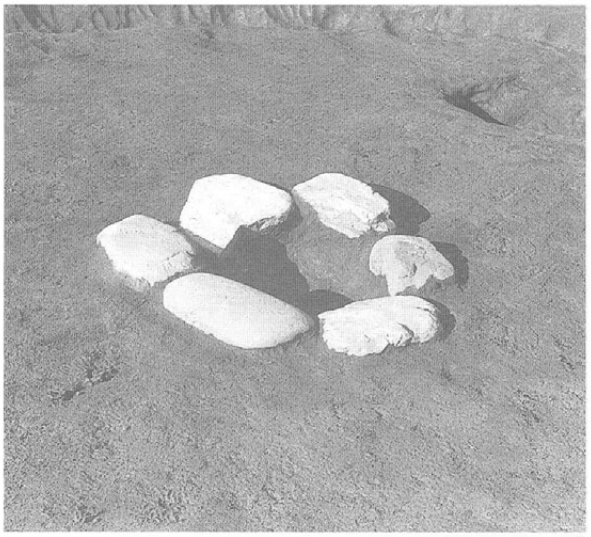


第1号住居址

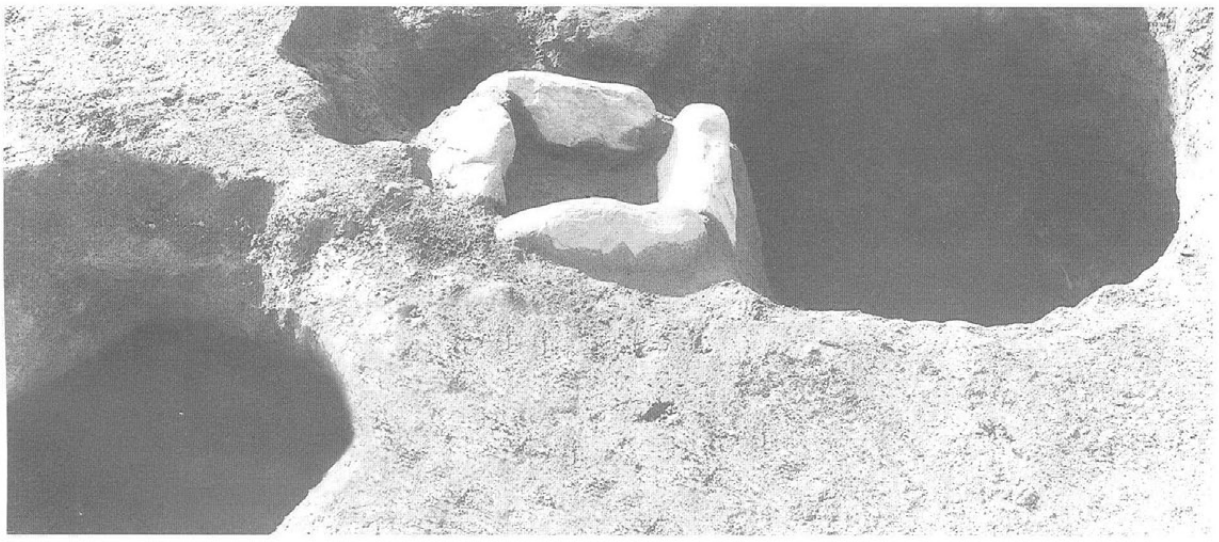
第3号住居址炉

第5号住居址炉

第6号住居址炉



第7号住居址炉



第8号住居址炉

第1号住居址竈

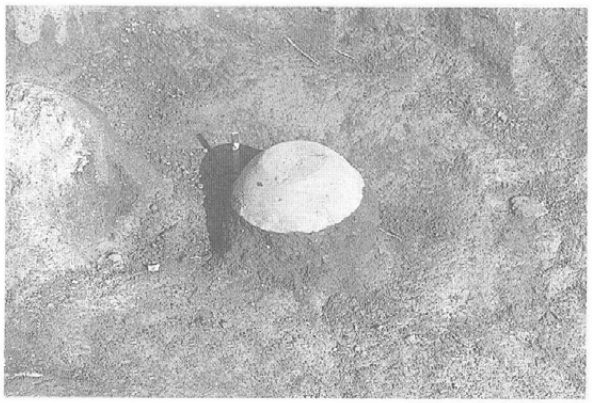
第4号住居址竈

土偶出土状況（第3号住居址）

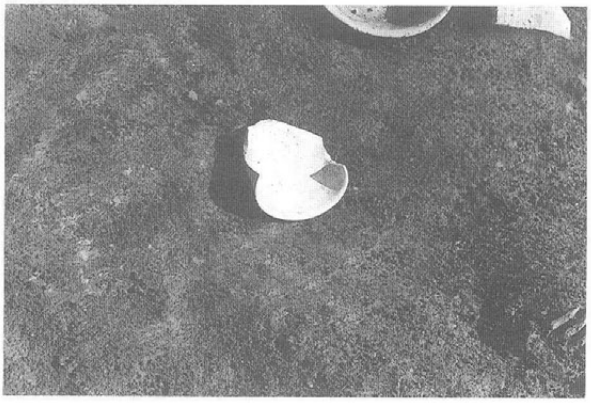
土偶出土状況（第5号住居址）

小型土器・板状土製品出土状況（第5号住居址炉内）

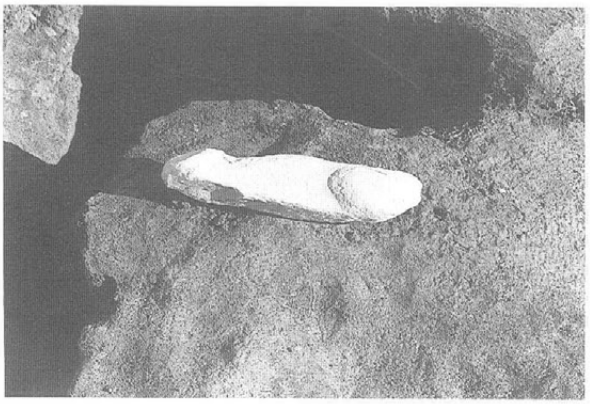
土器出土状況（第6号住居址）



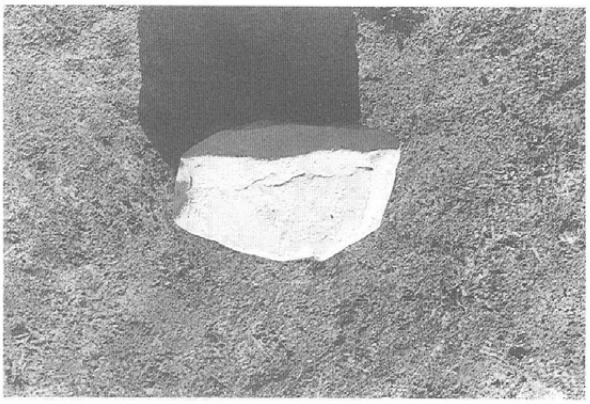
土師器出土状況（第1号住居址）



灰釉陶器耳皿出土状況（第4号住居址）



石棒出土状況（第6号住居址）



砥石出土状況（第8号住居址）

土偶の表面（第3号住居址出土）

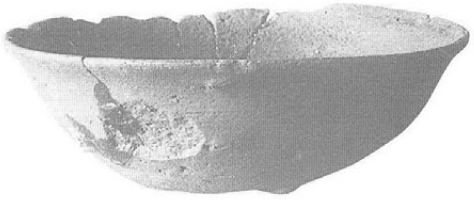
土偶の裏面

土偶（第5号住居址出土）

小型土器（第5号住居址炉内出土）

小型土器（第6号住居址出土）

板状土製品（第5号住居址炉内出土）



土師器坏（第4号住居址出土）

灰釉陶器耳皿（第4号住居址出土）

報告書抄録

ふりがな	いねずみいせき
書名	今泉遺跡
副書名	伊那北停車場山寺上村線
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
編著者名	御子柴 泰正　飯塚 政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617　長野県伊那市大字伊那部3050番地　ＴＥＬ(0265)78－4111
発行年月日	西暦2004年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
今泉（いねずみ）	長野県伊那市（ながのけんいなし） 伊那山寺（いなやまでら）	伊那市	41			平成15年 ５月28日 ～ 平成15年 11月24日	3,000	伊那北停車場山寺上村線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今泉	集落址	縄文時代 平安時代	縄文中期中葉 竪穴住居址 縄文中期中葉 土坑 平安時代竪穴 住居址	縄文前期土器 縄文中期土器 縄文中期石器 縄文中期土偶 縄文晩期土器 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器	今回の工事箇所の一部分が「今泉遺跡」の範囲内に含まれている可能性が強くあり、当初より大きな期待を持って調査に踏み切った。調査にかかってみると、期待していた通り以上の成果があった。狭い範囲の調査であったが、縄文中期中葉竪穴住居址６軒、平安時代竪穴住居址２軒、縄文中期中葉土坑１基が検出され、大集落址の一端を垣間見ることができた。 本発掘調査地点の北側には遺跡名が示す通り今泉（いねずみ）と呼ばれているように湧水地帯が大きく広がっている。

今泉遺跡
INEZUMI　SITE
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
伊那北停車場山寺上村線

平成16年３月15日　印刷
平成16年３月18日　発行

発行所　伊那市教育委員会
伊那市建設部建設課
印刷所　長野市　ほおずき書籍㈱